
守護霊（ガーディアン）と討手（ハンター）

泉海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガーディアンハンター
守護霊と討手

【Nコード】

N8869M

【作者名】

泉海斗

【あらすじ】

蒼陽学園高等学校2年の神崎佑介は妹愛華との2人暮らし。

ある日突如として現れた怪物・・・悪霊。

そんな悪霊たちに佑介と守護霊となった妹愛華がともに戦うという物語。

そして佑介の恋の行方は？愛華の恋は？

ターゲット0 とある人生の終わりと新たな人生 上（前書き）

いつもの平凡な日常を過ごしていた佑介と愛華。

楽しい学校生活が待っているはずだったのに・・・。

ターゲット0 とある人生の終わりと新たな人生 上

俺の名前は神崎佑介。蒼陽学園高等学校2年生だ。今日は入学式。俺には1つ下の神崎藍華という妹がいる。素直でかわいい妹だ。このまま育ってくれば兄としては鼻が高い。親は共働きで外交関係のためほとんど家にはおらず、つまり今まで妹と2人だけで生活してきたのだった。少々ブラコン気味なのは嬉しいのやら困るのやら・・・。そんな妹が今日ここ蒼陽学園高等学校入学するのだ。

「お兄ちゃん、早く行こうよ」

「なんで、まだ7時じゃないか。俺がいつも出るのは7時30分だろ」

「早く行ってお兄ちゃんとゆっくり通学路を見たいんだよ」

まったく、どこに行くにも兄である俺にくつついてくる。時としては困ることもあった。離れれば自分の支えがなくなるとでも思ってるのだろう。早く妹を支えてくれる男が来ればいいのだが・・・。それでもちやら男にだけは渡したくなかった。

「はいはい、わかったよ」

そうは言うもののあしらうことは俺にはできなかった。

「よかった」

につこりと笑う妹その笑顔を見られののなら俺はなんでもできる・・・ん？これじゃあシスコンじゃないのか？そうして俺は哀歌から手作り弁当（本人曰く、愛妻弁当）を受け取って一緒に登校した。これが最後の妹との人間同士の日常になるとは思わなかった・・・。

ターゲット0 とある人生の終わりと新たな人生 上（後書き）

感想＆評価お待ちしております。

ターゲット1 とある人生の終わりと新たな人生 中（前書き）

なぞの人物登場。

ターゲット1 とある人生の終わりと新たな人生 中

かつ かつ かつ 2人のそろった足音が聞こえる。知らない人たちから見たら俺達はたぶん恋人同士に見えるんじゃないかってくらい近かった。藍華は無意識なのだろうが兄としては嬉んだがそろそろ兄離れをして欲しいとも思う。かといって自分には彼女がいないのがつらい。哀歌に何人もの男子生徒が告白したが見事に撃沈させられてきた。フラグは乱立しているにもかかわらず、すべて排除してきたのだった。兄としては売れ死んだが、男としては断られた生徒たちに同情するし、申し訳なく思う。人間としてはどうしてそんなにフラグがたつのが分からず、軽い嫉妬ももっていたりする。(俺も顔は悪くないと思うんだけどな・・・)

そう言つて自己陶醉の入る。しかしそんなボーっとできる時間を登校時間において藍華は与えてくれない。常に自分と話をして欲しいのだそうだ。こっちだって少しはボーっとしたいんだよ我がシスター・・・でもなんだかんだいって俺も律儀に話しにのっかってやっている。途中近所の人たちに挨拶し(何回かまるでカップルみたいだね)と冷やかされた。藍華は満足そうだったが・・・、ようやく学校に着いた。

「わー。きれいだねー」

学校の回り一体には桜が植えられており、そのすべてが開花していた。まるで今日の入学式を祝福してくれているかのように・・・。

藍華はそんな桜に興奮したのか走り回っている。

「走って転ぶなよ!」

「分かつてる!」

本当に分かつてるのかね……。俺は近くのベンチに腰掛けて桜を眺めていた。風が薫くと桜が飛ばされひらひらと舞っていた。

「今日は最高の式になるな・・・」

それはちゃんと親が来ていればなおさらなのに……。仕事が忙し

くて行くことができないと今朝方親たちから電話が来た。愛かもこれないことを聞いたときには少し残念そうだった……。

「バカ親が……」

今まで俺達の行事に参加してくれたことは1度もなかった。学校から何度も着てくれるように行っていたが……結局着てくれなかった。それも仕事が忙しいから……。結局俺達よりも仕事のほうが大切なだろう……。そんな親なのだから……。仕方がない、割り切ろう……。ふと俺が顔を上げると目の前には同じ学校の女子生徒が立っていた。

「生徒会長？」

前にいたのは生徒会長吉川深夏さんだった。剣道の道場を開いている家で育ったため、剣道部にも所属していた。髪は黒く、長い。スタイル抜群で、学園のアイドルだった。それよりも生徒会そのものがアイドル集団的存在だった。それも人気投票だったためみんな女子生徒だった（そんなのでいいのかよ……。ちなみに俺も参加したっておい）。

「かわいらしい子ね。新入生？それとも……彼女？」

「妹です。今日ここに入学するのでよろしくやってください。

神崎愛華って言んです。俺は……」

「2年A組神崎佑介くんでしょ？あなたのことはよくうわさで聞くのよね」

「うわさですか？（やったーついに俺にも春が来るのかー）」

「ええ……。極度のシスコン生徒だって」

「ずさー俺は見事に転んでしまった。顔が痛い……。」

「あ……。あの、俺は確かに妹といつもいますけれども消して俺がシスコンのではなく、愛華のほうがブラコンなんです」

「あらそうなの？ごめんなさいね」

「いいえ、大丈夫です（絶対面白がってたな……）」

「そろそろほかに生徒たちや保護者の方々が来る頃ね」

「ああ、そうですね。もうこんな時間か。おい愛華そろそろ中に入るぞー」

「はい」

相当遠くまで走って行ったなあいつ・・・。

「くすくす、元気な妹さんね。うらやましいわ」

「あいつは元気が取柄ですからね」

「それじゃあ、あなたもしつかりと式を成功させるのよ」

「分かりました」

「それと・・・気を付けて・・・」

「？」

そう言っただけで生徒会長は学校に入ってしまった。俺は最後の気をつけるように言われたことの意味がまったく分からなかった。

ターゲット1 とある人生の終わりと新たな人生 中（後書き）

皆さんからの感想&評価お待ちしております。

ターゲット2 とある人生の終わりと新たな人生 ? (前書き)

さようなら俺達の日常・・・。
ようこそ俺達の非日常・・・。

ターゲット2 とある人生の終わりと新たな人生 ？

その後の入学式は滞りなく無事に済んだ。生徒会長しつかりとしたスピーチすごかったな。

そんなわけで俺と愛華は現在帰宅途中。そんな愛華は式の後でホームルームでたくさんの友達を作り、暮らすみんなから早速買ったばかりの携帯でアドレスなどを交換したらしい。笑顔がまぶしかった。「それでねそれでね・・・」

よほど嬉しかったのだろう。できた友達について色々教えてくれた。男友達もできたらしい。藍かもそろそろ恋人を作ればいいのと思う兄であるが、俺もそろそろ作らなければ置いてかれてしまう。笑ったり、突然落ち込んだり、泣きそうになったりと色々表情を変えていたためか心配そうに愛華が覗き込んできた。

「お兄ちゃん、体調悪いの？」

「そんなことない、お兄ちゃんにも色々あるからそれで色々考えていたんだ」

「それならよかった。それでね・・・」

延々と続けられる妹による報告。そろそろ勘弁してくれと思ったとき・・・そう・・・、このときに俺達は日常の世界から足を踏み外したのだ・・・。もう戻れない非日常の世界に足を踏み入れてしまったのだ・・・。

ずしーん ずしーん 目の前から巨大な怪物が現れた。腹から鎖みたいのがたれているやつ・・・。ぶっちゃ毛やばいんじゃないですか？

「お・・・お兄ちゃん・・・」

すっかりおびえてしまった愛かは腰が抜けたのかへたり込んでしまっていた。

「おい、逃げるぞ！」俺は哀歌の腕をつかんでもと来た道を走り始

める。それを見た怪物もまた、俺達に向かって向かってきた。ていうかなんで周りの人たちは気づかないの・・・て誰もいねえ。なぜかいつもなら人が歩いていてもおかしくない時間帯なのに誰も歩いていなかったのである。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

俺達はただひたすらの学校に向かって逃げていた。なぜ学校からは分らないが自分でも分からないが、なんとなく学校が安全だという勘が働いたのだ。逃げてる途中も誰とも会わなかった。そんな状況を愛かも顔面蒼白で走っていた。

「よし・・・ここまで来れば・・・」

突如俺の腕が軽くなった。見ると肘から先がなくなっていた・・・。愛華とともに・・・。

「うわー」

あまりの激痛に俺は悶絶する。遠くの桜の木下には俺の失った腕と愛かがいた。愛華も頭から血を流していて、危険な状態だった。

「ぐ・・・くそ・・・。なんなんだこいつは・・・」

目の前のは口からよだれを駄々流しにした怪物が1体。今にも俺に襲おうとしていた。

「お・・・お兄ちゃん・・・」

愛華が弱い声で歩いてきたのだ。

「バカ！何でこっちに來たんだ！さっさと学校に逃げ込めばよかったのに！」

「お兄ちゃんを置いていけないよ！」

「こんなときぐらい自分を大事にしろよ！お兄ちゃんらしいことをさせてくれよ！」

「お兄ちゃんがいなくなったら私・・・私・・・」

鋭いつめを持った腕が俺に向かって振り下ろされた・・・。

「おにいちゃんがいなくなったら私、支えてくれる人がいなくなっちゃう！そんなの嫌だよ！」

そう叫んだ愛華は俺のことを突き飛ばした・・・。ツキトバシタ・・・

・。

グシューウウウウ ブシユアアアアア

目の前で血が噴水のように噴き出していた。赤い水・・・血・・・
愛華の血・・・。

「ああ・・・ああ・・・」

俺は言葉にならないうめき声を上げた。目の前には腹から深々と引き裂かれた妹の変わり果てた姿があった。愛華は・・・俺をかばった・・・。何で？

「なんで俺なんかをかばったんだ!!」

俺は叫んだ。愛華は弱弱しく言葉を漏らす・・・。

「私がお兄ちゃんを誰よりも愛していたからだよ・・・」

そんな・・・そんなことがあっていいのか？俺のせいか・・・？俺が愛華を殺したのか・・・？

「逃げて・・・お兄ちゃん・・・」

俺は愛華に何もしてあげられなかった・・・。助けることもできなかった・・・。いつもそうだ・・・。愛華がいつも俺に笑顔をくれたから俺はいつも楽しかった。けしてシスコンではないが・・・これは兄として当然だろ・・・？でも兄である俺からは何も与えてあげられなかった。与えられてばかりだ・・・。俺は近くの木の棒を持つと怪物に向かって構えをとる。まったくの素人・・・。足は恐怖で震え、手も震えていた。まったく情けない・・・。

「お前のせいで愛華はこんなにも傷ついちまったじゃねえかー」

俺は叫びながら怪物に突っ込む。するとわき腹を何か硬いもの思いつき殴られて吹っ飛ばされた。ものすごく痛い。吐きそうだ。

「だ・・・誰だ・・・」

前を見るとそこには日本刀を持った生徒会長吉川琴美が立っていた。

「ごめんなさい、神崎くん。ほかの事件でここを離れていたの」

そう言って刀を取り出した生徒会長は神速を生かし怪物に切りかかる。怪物はまったく姿を捕えられずただ切り刻まれるだけだった。

そうして細切れになった怪物は青白い炎に変わり、そうしていつ現

れたのか知らないが、宙に浮いた犬に食べられていた。

「あ．．ああ．．何なのこいつら。そんなことよりも愛華！！」

俺はすぐさま倒れている愛華の元にいった。もう生きているのが不思議なくらいだった。息も絶え絶え．．．素人の俺でももう助からないことは一目瞭然だった。俺の傍に来た生徒会長．．．。その表情は申し訳なさでいっぱいだった。

「すまない、神崎くん。私が誰かをここに置いておけばこんなことにはならなかったのに．．．。本当にすまない」

頭を下げる生徒会長。しかし俺には何を言っているのかが分からなかった。

「生徒会長．．．謝られてもしょうがないですよ．．．。愛華．．．何とかなりませんか！救急車を呼んで．．．」

「ごめんなさい！愛華ちゃんは今もう助からないわ．．．」

やつぱり．．．。分かっているも認めたくなかった．．．。あきらめたらその場で愛華が死んでしまうと思ったからだ。

「そうですか．．．」

「愛華ちゃん．．．、私はあなたを殺してしまったといっても過言はないわ．．．。あなたはまだお兄ちゃんと一緒にいたい？」

「ま．．．まだお兄ちゃんと．．．一緒にいられるの？？」

弱弱しく立ったが、その言葉にはわずかな希望がこめられていた。

「ええ、あなたがお兄ちゃんの腕となり守護霊となり、先ほどの怪物みたいなものと一緒に戦うの．．．。それでもいいならあなたをお兄ちゃんと一緒にいさせてあげられます」

「そんなことができるんですか？俺がこいつらと戦えば．．．」

「ええ、その和目にはもう日常生活はできないわ．．．。醜い戦いの世界に足を踏み入れなければいけないわ．．．。それでもいいならばやってあげるわ」

俺はどうしたい？愛華とまだ一緒にいたいのか？俺は．．．俺は．．．。

「愛華は．．．愛華はまだお兄ちゃんと一緒にいたい．．．。お兄

ちゃんがいるならほかには何もいらぬい……。お兄ちゃんが傍にいてくれればいい……」

愛華は俺といたいと決心している……。なら俺がとるべき道は・・・選択肢はただ1つしかないだろ！！

「お願いします！！愛華を俺の守護霊にしてください！！」

俺は深々と生徒会長に頭を下げた。会長は一瞬と惑ったが、納得した表情になった。

「分かったわ、あなたたちが決めたことならば私は止めない。その代わり、神崎くんあなたには生徒会に入ってもらいます。詳しいことは明日生徒会室で話しますので今は何も聞かないでください」

すると会長はポケットから御札と黒い数珠を取り出した。御札を愛華に貼り付け、数珠を俺の失った右腕にのせた。激しい痛みを必死に我慢していた俺だが、さすがに傷口に物が載せられたときには悲鳴を上げてしまった。そんな時……。

『まったくなんなのさ、この男は。深夏は両足失っても泣かなかったのに腕一本でこうもピーピーと』

「ハク！！言いすぎだよ！！神崎くんは何も知らなかったんだからいきなりでしょうがないよ。それよりも始めます」

そうするといきなり回しが白い光で満たされた。

「これより契約するものの名は神崎佑介、守護霊たるものは神崎愛華。我吉川深夏、そしてその守護霊ハクを媒介として契約となせ！！」

辺りを包んでいた光はなくなり、俺の腕は元通りになっていた……。ただ、右手に刀があることを除いては……。

それに後ろには前に倒れていた哀歌が透明になってふわふわと浮いていた。

「本当に幽霊になっちゃったの??」

「私お兄ちゃんの守護霊になっちゃった」

「今日のところはここまでだ。詳しいことは明日の放課後生徒かいしつで説明する。われわれの仲間も紹介しよう。必ずその刀も持つ

てくるんだ。普段は守護霊に持たせておけばいい。守護霊は使えないけれどもな」

「分かりました……。後愛華の死については……」

「それはわたしたちが愛華ちゃんに急に引越すことになったことを伝えておきます。もちろん連絡はできますよ、今までどおり携帯で」

「それじゃあ、この刀以外は今までどおりの生活ができるのですか？？」

「ええ、おなかも空くし、眠くもなるしね」

結局のところ、今日はここまでで打ち切りになった。さあ、これから俺の生活は一体どうなるんだ？？

ターゲット2 とある人生の終わりと新たな人生 ? (後書き)

感想&評価お待ちしております。

ターゲット3 生徒会の正体 ? (前書き)

非日常の生活が始まる。

ターゲット3 生徒会の正体？

非日常の出来事が起こってからの翌朝。俺はいつものとおりに眠い目をこすり、2階の部屋からリビングに降りた。リビングにはいつものように妹の愛華が朝食と弁当を作っていた。彼女の姿はかすかに透けていたのは、機能の戦いで悪霊に死を与えられたためであり、俺の守護霊になったためであった。

『あ、お兄ちゃん。おはよう』

「ああ、おはよう。霊になってもいつものように作ってくれるのか。ホントにありがとうな」

『いいんだよ、私はお兄ちゃんがおいしそうに食べてくれるだけで幸せだから』

妹は屈託のない笑顔で言う。彼女にも俺ではない別の男との付き合いもこれから生活で見つけることができたかもしれないのに・・・昨日のことさえなければ・・・俺があそこで・・・

『お兄ちゃん??何そんなに深刻な顔してるの??まさか私が死んだことを自分のせいだと思ってる??』

何で分かった??お前はエスパーか??

『私はおにいちゃんのことなら何でも知ってるよ。伊達に16年一緒にいたわけじゃないんだから』

そうか・・・良かった・・・これで最新までつながってたら俺の考えてることなんて全部丸分かりになって、後々恐ろしいことになってるからな・・・

「ところで俺の刀は今どこに??」

『私が持つてるよ。私が持つと見えなくなるらしいね。でも私はどこにあるのかちゃんと分かるから心配しなくてもいいよ』

俺は愛華から刀を受け取ると、広い庭に出て素振りを始めた。剣道なんてやったことないからな・・・あの後本屋によって入門書を買って一応目を通して見たものの、やはり一朝一夕ではできないか・

・・・俺はそれから朝食ができるまで延々と刀を振り続けた。昨日から違和感があったが、もぎ取られて、契約で直った右腕だけが今までの右腕とは何か違うものと感じられた。まあ・・・今日の放課後にも分かるだろう・・・あの生徒会長なら何か知ってるだろうさ。俺はそう簡単に高をくくっていた。それから朝食をとり、いつもの時間に学校へ出発した。もちろん守護霊の愛華も一緒に刀を持って。昨日と同じ通学路・・・昨日は人間の妹と歩いていたのにそれが1日で変わってしまうものなのだろうか・・・。昨日同じ風景、同じ桜の木、同じように登校する生徒たち、同じように走る車・・・など昨日と同じ風景なのに・・・何か寂しく感じられた。愛華はそんなことはお構いなしに風景を楽しんでいた。俺はそれを見て何かいたたまれなく感じた。教室に着くと近くの友達としゃべる。斉藤智・新部明・小西桜・加藤尚子の仲の良い4人組だ。俺は小さい頃から近所に住んでいる小西桜が好きだ。身長は女子高生の平均よりも若干低いがそこがかわいい。栗色のショートヘアがなんとたまらない。って俺はロリ属性か??まあ、そこはいいとして・・・俺を含めた5人でホームルーム前の会話を楽しんでいた。「昨日学校で大きな爆発があったんだって!!」

小西さんが言う。それは俺と愛華が悪霊だったかな??に襲われたときのだな。

「ああ、差から今日の朝から業者の人たちが来てたのか。グラウンドに大穴開いてたからな。一体何があったんだ??」

智が言う。それは生徒会長が悪霊を切って、悪霊が爆発したからだったからかな??それと俺達の契約のときのも含まれるのかな??

「最近だけど行方不明になる若い人たちが続出してるらしいね。まあ、若い人たちだけじゃないけどね」

加藤だ。確かにニユースではなんだかいじめを苦にしていた男子中学生が3日前から行方不明だと言ってたな。悪霊と何か関係あるのかな??

「ふっはははは、事件があるところに新部あり!!俺はその行方不

明が明らかになったときからそのこの行方を捜しているんだぜ!!」
まったく親が警察だからってお前までやることないだろ明らめ。

「そんなこと言っなよ佑ちゃん、俺は将来警察になるんだから早くからやつても損はないだろ??」

だからその佑ちゃんはやめてくれ、はずかしい……。それよりもし危ない目にあつたら元も子もないだろ??

「そんなことを恐れて警察が勤まるかよ」

「だから佑ちゃんが言いたいのは明が危険な目にあつたら親が心配するってこと」

おお、ナイスフォローだよ小西さん。あなたは俺の天使だ!!女神だ!!

「佑ちゃん……。目が羨望のまなざしになってる」

なっなんと!!気づかなかつたぜ。加藤に突っ込まれる俺。

「実は俺も明の手伝いしてるんだぜ」

お前もかよ智……。俺はなぜ彼らがそこまで事件に首を突っ込みたくなるのかが分からなかった。

「それはだね佑ちゃん……」

「俺達が心霊探偵団に入部してるからなんだよ……」

ずってーん　なんですかそれは……??俺は思わずイスからずっこけた。ものすごく痛い……。

「大丈夫??佑ちゃん」

心配そうな顔をして近づいてきた小西さん。ああ……。小西さん……。ありがとう。僕はもう死んでもいい。

「佑ちゃん……。口から白いものが飛び出してる……」

はっ!!あぶない、あぶない。本当に死ぬところだったぜ。サンキユー加藤。

きーん　こーん　かーん　こーん　朝のホームルームの始まる鐘が鳴った。

「……また後でね……」

4人はそれぞれの席に戻った。小西さんは俺の後ろの席。いつでも

話しかけられる。

『お兄ちゃん・・・なんかいやらしい目で小西さんを見てるよね・・・』

ジト目で愛華が俺を睨みつけてくる。正直怖いですが、ハイ・・・。でも愛華よ、そんなことはないぞ。小西さんは今日もかわいいな、って思ってたんだよ。

『そのときの目がいやしかった』

うつ・・・、うそは付けないな・・・。確かに俺は小西さんと一緒にいたいと思っていた。ブラコンの愛華には悪いが俺は昔から小西さんのことが好きだった。でも、小西さんは今誰かと付き合ってるのかな？？プライベートのことには一切関与しないようにしてたんだがな。それは万人に対してだぞ！！小西さんだけではない！！

『それよりもさっきの話・・・、やっぱり昨日の悪霊みたいなのが関わってるのかな？？』

それは分からない。だから今日生徒会室で説明があるんだろうさ。放課後まで待てばいいさ。

『私は退屈なんだよ・・・。何か面白いことはないかな？？』

周りにたくさん守護霊がいるんだからそいつらと話せばいいだろ。『それもそうね。ありがと、お兄ちゃん』

そう言つて愛かは近くの守護霊たちと会話を始めた。すぐに溶け込んでいるようだった。相変わらず人間でも守護霊でもすぐに仲良くなれるのは愛華の才能なんだな。つくづくもったいないことをしたもんだ・・・。それよりも昨日から俺は今まで見えていなかった霊が見えるようになった。さらに守護霊と悪霊モドキの区別も付けられるようになった。なんというか・・・オーラが違うんだよな。守護霊はなんだかぼかぼかと暖かい感じがして一緒にいて幸せに感じる。でも悪霊は近くにいたるほど肌寒く、心が凍らされる感じだった。これからどうなるんだか・・・。俺は小さくため息を吐いた。

ターゲット3 生徒会の正体 ? (後書き)

感想&評価よろしく願いします!!

ターゲット4 生徒会の正体 ? (前書き)

接触はいかに・・・。

ターゲット4 生徒会の正体？

なんだかんだいって放課後になった。勉強で疲れきった頭を抱えながら生徒会室に足を運んだ。

から ながら ドアを開くとそこにはすでに役員が全員いた。

生徒会長 吉川深夏

生徒会副会長 松本紗都子 開き枠1名

生徒会書記 花田美香

生徒会会計 小西桜

そこには思い人小西さんもいた。しかしいつも見せている明るい笑顔ではなく、値踏みするような冷たい視線を送ってきた。ほかの役員たちもそうだった。生徒会長が歩み寄ってきた。

「疲れているところすまないがこれから昨日のことも含めて説明をしたいと思う」

「あ、はい」

俺は据わるように言われ、言われたとおりに4人に向かい合う形で座った。いやゝゝ威圧感バンバン出てきますねゝ。おっかないゝゝ。

「それではまず自己紹介からしよう」

会長が話す。

「私がここ蒼陽学園高等学校生徒会長3年の吉川深夏だ。幼いときに悪霊に両足をつぶされた。そのとき守護霊となってくれたのがかつての愛犬のハクだ」

会長の出した手のひらの上にふわふわと白い柴犬が現れた。

『にーちゃん、腕の痛みはない様で何より。この前はすまなかったな。一般人を巻き込むつもりはなかったんだが……。まさか1日に複数個所に出現することは今までなかったから対応できなかったんだよ』

「……はい」

『お兄ちゃん……。私はお兄ちゃんと一緒にいられるから大丈夫だよ』

「愛華……」

「次は俺だな。俺も同じく3年の松本紗都子だ。小学6年の頃に両目を失った……。そして俺の守護霊は緋龍だ」

そこには若い男性の守護霊がいた。いまどきのファッションだろうか。そういえば守護霊が触れたものはすべて霊体化するんだった（守護霊がほしいと思ったものだけ）。

『おぬしのこととはハクに聞いた。妹を殺されたそうではないか……。つらいだろうが君もこつち側のものだ。耐えてくれ』

「……。はい」

「ええつと……。あうう、わた、私は1年の花田美香と申します。ええつと、私は去年の夏に海で吉川さんと同じく両足を失いました。この子が私の守護霊のルカです」

そこには小学生ぐらいの女の子の守護霊がいた。背は小西さんぐらいだろうか（小西さんのロリ体系が萌えうって目の前で一番威圧感出してるんですけど……）

『どうぞよろしくね。神崎佑介くん』

「ああ……。はい」

「最後に私です」

「小西さん??」

何で小西さんがここにいるんだ??いつも見てる感じ普通の女子高生だったじゃないか……。

「名前はいいわよね、佑ちゃん。私の守護霊のフィオネ。これからよろしくね」

最後はいつもの小西さんの笑顔だった。一体どちらが本物なんだ??そこには女騎士の守護霊がいた。相当昔の時代の人だな……。

『汝……。我らとともに戦う意思はあるか??』

俺を試している??それを読み取ったのか小西さんとフィオネは同時にうなずく。俺は右腕を奪われた……。そして俺は愛華を

やつらに殺された。恨んでも愛華はもう戻ってこない……。少し考えてから……。

「あります。やらせてください!!お願いします」

「わたしたちははじめからあなたをここに向かい入れることにしていたから心配要らないわ。これからよろしくね。生徒会副会長神崎佑介くん」

「へ??」

いきなり俺が副会長??なんでだ~~~~~!!

こうしてよく分からない生徒会と言つ名の裏組織と接触した俺と愛華だった。

ターゲット4 生徒会の正体？（後書き）

感想＆評価・コメントお願いします。

ターゲット6 初めてのミッション ? (前書き)

最初のミッションとは??

ターゲット6 初めてのミッション？

そうしてお互いの自己紹介が終わったところで生徒会長が会議を
始めると切り出した。

ホワイトボードには初期の花田さんがなにやら地図を張り出した。

そして人数分のなにやら資料を配布してきた。

俺は藍華とともに資料に目を通してみる。

なにになに??

蒼陽学園高等学校 家庭科室における謎の呼び声事件についての
資料

（「いきなり事件ですか……??」）

（『お兄ちゃん、ここはみんなにおにいちゃんが有能な人だってこ
とをアピールするチャンスだよ!!』）

（「おお・・・マイスターよ・・・これでは俺がいつも無能な高
校2年生だということになってしまっではないか・・・」）

（『そろそそんなことないよ～。お兄ちゃんはいつもテストはい
い点とるし、運動神経も悪くないし、異性同姓がかかわらずやさしい
じゃん!!お兄ちゃんは有能だよ!!』）

（「うゝむ、まあそうなんだが・・・なんでお前がいろいろ知っ

てるんだよ!!」)

(『えへへ、お兄ちゃんのことなら何でも知ってるよ』)

(「怖!!何で星が黒なの??ねえなんで??」)

というかそれはさておき。

俺は再び資料を見た。

なになに・・・??

蒼陽学園高等学校 家庭科室における謎の呼び声事件についての資料

・つい1週間前から家庭科室から謎の女性の声がするという声が多数来ている。

・差出人はいずれも夜遅くまで部活が行われている部活参加者。

・いずれも夜9時に決まって家庭科室で声を聞いている模様。

・われわれ生徒会組織の調査によると数年前に家庭科室で自殺した女子生徒がいるらしく、その生徒が悪霊化したのではないかと疑っている。

以上 平成2 年 記載者 生徒会書記 花田美香

などと書かれている。

ていうか怖いよ!!マジで幽霊だなんて怖すぎるよ!!

俺は何ができるってゆうんだ??刀は効くのか??早速俺の覚悟は揺らぎ始める。

そんな俺の疑問に小西さんが気づいたのかアドバイスをくれる。

「今佑ちゃんの持っているその刀はただの真打の刀。ただし、佑ちゃんの守護霊・・・藍華ちゃんの霊気を刀にまわせることだ悪霊を切ることができるんだよ」

おお～～小西さん。やはりあなたの笑顔は天使だ～～。

ありがとう～～。

そんな俺の心の言葉が分かったのか、フィオネはくすくすと笑っていた。

笑わなくてもいいだろ??

ぐすん・・・。

そうしてそんな俺のことは無視して会長は高らかに宣言する。

「それでは今夜の8時30分に再びここに集合。そうして9時には家庭科室付近を立ち入り禁止に!!!9時に悪霊を討伐する」

「「「了解!!」「」「」

あつら～～??

俺もつられて言っちゃったよ～～。

隣では小西さんがガンバ!!!の意味を込めてか親指をぐつとつき立てた。

ほんとに俺・・・大丈夫??そして心優しい妹の藍華はそんな緊張

する俺に。

『大丈夫だよお兄ちゃん。危険なときには私が守るから』

妹に守られる兄って一体・・・。

ガク・・・。

ターゲット6 初めてのミッション ? (後書き)

感想・評価・コメントお待ちしております。

ミッション7 初めてのミッション？（前書き）

今戦いが始まる・・・。

ミッション7 初めてのミッション？

そうしてその日の夜8時30分。生徒会メンバーは生徒会室に集合していた。

「これより今日のミッションを決行します。私と小西が先陣を切るのではかは後衛を頼みます」

生徒会長が宣言した。これは絶対従わなきゃいけないな。俺まだこれの使い方知らないから。俺の右手には一振りの刀があった。

契約時に手に入れた刀だ。『牙狼丸』これが俺の相棒。でもどう使えばいいのかがまだわからない。まあ、今日のミッションは見学みたいなものだからな。俺は余裕しゃくしゃくだった。

「了解」

いつものきはきとした声ではなく、ただ無機質な声を出す小西さん。ここで俺は少し不安になってきた。

「了解」「了解」

俺たち3人も同じく承諾する。

こつ こつ こつ こつ

5つの靴音が学校に響き渡る。学校にはすでに5人以外の生徒はいない。

さらに学校内にも誰もいない

どうやら会長が結界を張り、学校に近づいても入る気をなくさせる効果を持つ結界を張ったそうだ。ほかの生徒には被害にあって欲しくないことからだった。そしてようやくついたそこは家庭科室。例の女子生徒の声がするところだ。中からはうわさどおりの泣き声が聞こえてきた。

「・・・うう・・・ひぐ・・・えつく・・・なんで???・・・なんで私が???・・・なんで???・・・」

「ひっ!」

俺は思わず声を上げてしまった。

ごちん!!

刀の鞘で頭を思いっきりたたかれた。会長だった。

「男なら、これくらいのことではびるのではない。それともお前は男ではないのか??」

「んなわけないだろ!! わかったよ!! 悪かったよ!! これっきりだ!! こんちくしょう!!」

俺はやけくそ気味に叫んでみる。それを見ていた4人はくすくすと笑っている。って俺何がおかしなことしましたか?? ああ・・・小西さんまで・・・俺悲しすぎる・・・そんなこんなで俺たちは時間をつぶし、時間通りに9時に家庭科室に突入した。武装は以下のとおり。

- ・会長 日本刀（俺と似たもの）『鬼爪丸』
- ・松本副会長 ビデオカメラ（どうやら彼女は先頭というよりも対悪霊のための情報収集者らしい）
- ・花田書記 御札（彼女の家はどうやら神社らしい）
- ・小西さん（会計） 日本刀（俺や会長と同じ）『竜神丸』
- ・俺（副会長）日本刀 『牙狼丸』

俺たちの目の前に広がるのは暗い暗黒の空間のみ。花田さんは教室中に御札を貼っている。

「花田さん、何をしていらっしゃるのですか??」

「このままの空間では悪霊さんは出てきてくれませんか。無理やり引きずり出してやるのですよ。うふふふ」

こわ!! 人が変わっちゃったよ!! そう思った瞬間、目の前がまぶしすぎる光で包まれた。外の結界でほかの人には気づかれならしい。

（会長がこっそりと教えてくれた）そうして俺たちの目の前には1人の女子生徒がいた……。というよりも女子生徒だったといったほうがいいかもしれない……。顔は涙や鼻水でぐちゃぐちゃ……。体は骨と皮の状態で、背中からくものように8本の足が出ていた。そう、家庭科室中が蜘蛛の巣だらけだったのだ……。

「ちっ!! レベルCか。今日は少し時間がかかるかもしれないな」

会長が珍しく弱気な発言。

「大丈夫で巢や会長。隣には小西さんがいますし、バックには花田

さんがいます。あ・・・神崎君は今回は荷が重いかしらね・・・」

うつ・・・、俺今日役立たず??

「そんなことよりもいくぞ!!」

会長かつこいい〜。

「はい!!」

小西さんいつもの人柄とのギャップが大きいです〜。

2人は悪霊に向かってかけだす。花田さんが後ろからお札で悪霊の攻撃を無力化して会長と小西さんがそれぞれ足を切り刻んでいく。きられるたびに悪霊は奇声を上げる。鼓膜が激しく揺さぶられる。そんな時俺の頭に何かが映像として流れ込んできた。なんだこれ・・・。

・・・

どうやら夕方らしい。ここは・・・教室らしい。俺は1人入り口に立っていた。そして目の前には悪霊化するまえの女の子と同級生らしい男の子がいた。

女の子は何か包みを渡しているようだ。クッキーだった。男の子はそれをうれしそうに食べていた。女の子もうれしそうだ。

どうしてこんなにも笑っている子が悪霊化してしまったのだろう・・・。
俺には理解できなかった。そしたら声が聞こえてきた。

「……くん……。私あなたのことが好きです。付き合ってください」

どうやら告白らしい。なんだかここにいてはいけないような感じがしたので立ち去ろうとしたのだが足が鉛がついたように動かなかった。なんなんだ??これは……。

「よろこんで!!」

うわっほっい。男のこの方はおっけっ出してくれましたたよおめでとございます!!でも悪霊化するってことはこの後何かがあったんだろうな……。そうするとまた映像が変わった。すると目の前にはあの男の子とまた別の女の子がいた。

なんだかいやな予感がしてきた。

「……くん。私あなたのことが好きなの。付き合ってくださいませんか??」

「ああ、いいぜ!!」

なんだと??お前には今彼女いるだろ!!俺に怒りが生まれ始めた……。

「ほんと??やったっ。でも今の彼女はどっするの??」

「ああ、あいつはもう飽きたから捨てることにするよ。今はお前が好きなんだよ」

「きや~~~~うれしい~~~~」

信じられなかった……。どうやらあいつは女たらしのようだ。もてることを口実にほいほいと女を替える……。許せん！彼女のみにもなってみろ！お前のために毎日弁当作ってくれてたじゃねえか！お前はそれをおいしいといって笑顔で食べてたじゃねえか！！そんな優しい彼女の思いをお前が踏みにじったんだ！！

俺がそう思っている隣でどさつと言う音が聞こえた。振られたあの女の子だった。どうやらいつまでたつても来ない彼氏を探しに来たのに聴きたくない言葉を聴いてしまったのだろ。その姿を見た彼氏は逃げるように新しい彼女をつれて逃げるようにかえって言った。

彼女は泣いていた……。抱きしめてあげたいと思った……。こんなにもかわいいのに……。一途だったのに……。信じていた人に裏切られてしまった彼女の心はどれほど傷ついてしまったのだろつか……。

「なんで……。??何で私じゃだめなの……。??ねえ……。なんで??」

彼女はのろのと歩き出した。俺はそこからまた動けなかった。そして気づいたときには家庭科室だった。目の前には遺書を置いて首をつろうとしている彼女がいた。俺はやめろと何度も叫んだ……。しかし聞こえるはずなかった。くやしかった……。だってこれは悪霊となる前の彼女の記憶だから……。

そうして苦しみながら彼女は死んでいった。俺は見ることができなかった。見てることしか、聞いていることしかできなかった。動けないから……。何で動けないんだ！！何がおきてるんだ俺には！

！手には刀、『牙狼丸』があるというのに・・・。

カタカタと刀が動く。まるで俺を抜けといわんばかりに・・・俺はお前を抜くことはできない。だって体が動かないから。そうしたら目の前に妹の藍華が現れた。

『お兄ちゃんはこの人のことを助けたい??』

妹が当たり前のことを聞いてくる。

「当たり前だろ??あんなに傷つけられたのに・・・ぼろぼろのままで・・・死んでいいはずないだろ!!」

俺は藍華に向かって今までにないほどの怒りをぶつける。藍華は少しびっくりしていたが、すぐに薬と笑った。

「何がおかしい・・・。おれは当たり前のことを言っているんだ・・・」

『ここで彼女を助けても現実では生き返りはしないんだよ』

「そうだろうな・・・。でもな・・・いつまでもここに未練を残してたら次に進めないだろ??この子の魂はずっとここにあった・・・。誰にも救われず・・・。誰にも気づかれず・・・。ずっと一人ぼっちだったんだ・・・。だから俺は・・・」

そう・・・俺が今したいと思うことは・・・。

「俺は生徒会副会長だ!!学校にいる生徒全員の幸せを願うのが俺たちの仕事だ!!だから俺は彼女の魂を救ってやる!!」

俺は曇りのない答えを言い放つ。そしたらパリンという音がしたと思ったら、先ほどの先頭の風景に戻っていた。会長たちは方で息を置いて、花田さんはすでに御札がきれかかっている。松本さんはすでに10本以上のビデオを映している。どうやら俺は相当の時間悪霊の記憶を見ていたようだ。

「すみません。なんだか悪霊の記憶らしきものを見ていました」

「悪霊の記憶??それよりも何とかしなくちゃ……。いくらきつてもすぐに回復しちゃうのよ。会長も小西さんも疲れが出ていて……」

「わかりました……。」

俺はそういつて悪霊の前に立つ。やはり涙を流している。つらかったよな……。悲しかったよな……。恨んだろうな……。でもそんなものは俺がすべて切ってやるぜ。お前は今負の鎖につながれている……。俺にはわかる……。藍華がそう教えてくれたからな。

「会長!!!小西さん!!!俺がやりますのでどいてください!!!」

「佑介くん??」

「佑ちゃん??何するつもり??」

彼女を救うには正の霊圧をかけてあげるしかない。しかしどうすれば……。

『お兄ちゃん・・・大丈夫だよ。藍華がいるから。お兄ちゃんと私なら何でもできるよ!!』

「くすつ。そうだな」

今の俺はやわらかい笑顔になってるだろう。久しぶりだな・・・。

『私の靈気を『牙狼丸』の刃の表面にコーティングするから。後はお兄ちゃんの好きなようにしてね』

「おいおい!!最後の最後で俺に振るのか??大仕事を俺だけに?」

『大丈夫だよお兄ちゃんなら。だって刀の問いかけが聞こえたんでしょ??』

そうだ・・・。あの時俺に問いかけていたのだ・・・。俺たちならできると・・・、だからお前はやるのかと・・・。そして俺はやりたいたった。なら答えはひとつ・・・。

「俺は悪霊の魂を救う!!!」

すると俺の右腕と刀が一体になった感じがした。今なら何かができる気がした。藍華はすでに完了したらしく見ているだけだ。ほかの役員も俺のことを見ている。悪霊は俺と正面で退治し、今にも襲い掛かるうとしている。俺は入門書で興味を持った構えを取る。抜刀の構えだ。

「俺はお前の魂を救ってやる・・・。だから少し待ってる・・・」

そうして俺は一気に抜刀した。刀の刃からは白い残櫓が飛びだした。それは悪霊をすべて包み込んでいく。悪霊は悲鳴を上げて消えていく……。花田さんはすぐに御札を使い、成仏陣をはり、その中に女子生徒が倒れた。傷1つない状態で。おそらく死ぬ前の姿だろう。きれいだった。そうして彼女はゆっくりと起き上がると俺たちに笑顔を作り……。言った。

『ありがとう』彼女は光に包まれて消えていった。残ったのはさっきの家庭科室。何事もなかったかのようだ。

「ご苦労だった。佑介、今日は助かった。このままだったら私たちはやられていたかもしれない」

「いえ……。俺はできることをしただけですから」

「そういつて、できることがすごく大きいことなんだよ佑」

「佑??」

「ぐぐぐぐくろっさまでです」

「緊張しすぎですよ花田さん」

「ありがとうね、佑ちゃん。おかげで助かったよ」

「どういたしまして」

「今日の戦いは俺が責任を持って分析してくるから明日の放課後生徒会室でミーティングということだ」

「みんな、異議はないわね?」

「「「ないで〜」」」

「ふう、それじゃあ今日は解散」

「「「「お疲れ様でした〜」」」」

そうして俺たちはそれぞれの家に帰っていった。俺と藍華の初めてのミッションは成功だった。しかしこれからも厳しいミッションが入ってくるんだろうな……。そう思いつつすぐに眠りに落ちてしまっただった。

ミッション? 初めてのミッション? (後書き)

コメントお願いします! ! !

どたばた騒ぎとミッションIN修学旅行〜飛行機編〜（前書き）

次の日の朝何かが起きる！！

楽しみにしていたはずの修学旅行が・・・。

どたばた騒ぎとミッションIN修学旅行、飛行機編

ちゅん　ちゅん　ちゅん

すずめの鳴き声と共に起き上がる俺神崎佑介。昨日のミッションの疲れはないようだ。ゆっくりと伸びをして立てかけておいた刀を手に持ちしたに降りる。顔を荒いすっきりするとリビングには守護霊である藍華がすでに朝食の準備をしていた。

「おはよう、藍華。体調の方はどう?？」

俺の昨日使った昨日の靈気の斬撃波は藍華の靈気だったからだ。心配するのも無理ないだろ?俺って優しいお兄ちゃん?え?当たり前?そうだよな。

そんなことよりも朝食が完成するまでの時間俺は刀の素振りをする。剣道の振り方だけではなく、自己流で抜刀の練習もしている。

しかしよくぶつつけ本番でできたよな。俺って天才??え??自惚れるなって??そうですね・・・ごめんなさい。俺がしょげていると藍華が朝食ができたのか元気よく俺のことを呼ぶ。

『お兄ちゃん!!ご飯できたから早く食べよ!!』

「はいはい、了解しました」

俺たちは朝食を食べ終わると学校へ向かった。そういえば今日は生徒会のミーティングだったな。まあ、裏の仕事のほうだけだね・・・。

俺は刀を藍華にもたせて通学する。まさか銃刀法違反はしたくないからな……。

そうして学校について俺のクラスに入るとそこには小西さんしかいなかった。彼女以外には誰もいない。

「待ってたよ……佑ちゃん」

いつもの笑顔で俺に声をかけてくれる。しかし雰囲気が違う。

「おはよう、小西さん。早いんだね……」

「うん……、佑ちゃんと話をしたかったから」

が　ら　が　ら

突然開いてない扉が開けられた。そこには生徒会長がいた。

「あ、会長おはようございます」

俺はいつものごとく低姿勢で挨拶する。しかし会長はただ小西さんだけを見ていた。見ていたというよりも睨んでいるな。ただならぬ威圧感に俺はおされ気味……。

「変な結界朝早くから仕掛けてると思ったたら佑介君とお楽しみでもしようとしたのかしら??」

会長は厳しい口調で質問する。

「いいえ、私は昨日の事について少し聞いておきたいことが彼にあったもので・・・」

はきはきとしたいいつもの口調ではなく、仕事モードの無機質な声だった。

「それについては松本がすべてまとめてくれている。知りたいことは放課後にしろ。これでは生徒たちが遅刻してしまうぞ」

最後だけは会長は笑って会話をきる。小西さんは仕方がないといわんばかりに顔をしかめて結界をとく。

「結界崩壊」

結界を張るために使われていた御札が青い炎で焼かれて消えてしまった。するとすぐに教室の中に生徒たちがぞろぞろと入ってきた。
友達の齊藤智・新部明・加藤尚子もいた。教室内には俺と小西さんと会長だけしかいなかった。でもよく見ると会長はいなかった。

（会長逃げやがった！！）

そんなことより、彼らの眼から見れば俺と小西さんが何か卑しいことをしようとしていたのか、はたまた告白していたのではないかと映っているに違いない！！そうに違いない！！それを無視して俺は彼らに挨拶する。

「おはよう3人とも・・・。今日も天気がいいね〜」

確かに快晴である。しかし彼らは誤解していた。否クラス全員がだった。

「「お前ら2人で何してやがった~~~~!!!!」」

悟と明が涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で聞いてくる。

(汚いからまず拭けこのやろう・・・)

「・・・あの~~」

なんだか言いずらそうに聞いてくる尚子。顔が真っ赤だ!!

「桜っちと何かした??」

いやいやいや!!何もしていませんよ尚子さん!!俺はただ2人で世間話をしてただけです。

「休日のデートの打ち合わせか??」

バカの谷川が聞いてくる。お前は本当にバカだ!!俺はまだ小西さんとは付き合っていない!!ただ世間話をしていただけだ。

「それじゃあ桜っち。何について話してたの??」

だからただの・・・。

『黙りなさい!!』

クラスの女子に怒鳴られた・・・。こわ!!何この恐怖・・・。

「聞こうとしたのは私の方なの 昨日のことなんだけどね・・・。

夜に学校であつたことについて・・・」

ああ・・・、その「夜」と「学校」という禁じられたワードを使えば最後ですよ。小西さんって・・・目の前には・・・眼を光らせた女子たちと鬼の形相の男子たち。

がたがたがた・・・、恐怖です。殺される？僕も守護霊につて・・・おわく殴るな！！イタイタイ！！ってどうして小西さんは顔を真っ赤にするのですか？？それでは逆効果ですよ！！俺は必死にアイコンタクトで小西さんにごまかすように伝えた。小西さんとフイオネなら俺の意図を完璧に理解してくれるはずだ！！頼むぜ2人とも！！・・・しかし俺の期待は裏切られた。

「大変だつたんだよ。糸がぐるぐる巻かれてて、何度繰り返しても倒れないの・・・。私限界までがんばつただけだよ。やっぱり最後は佑ちゃんに持ってかれちゃった。テヘ」

黒いですよ！！黒いですよ！！最後の星がなんだか悪意を感じる黒なんですけれども！！小西さん！！あんたわかっててやつてるでしょ！！フイオネも笑うな！！藍華助けてって何怒ってるんだ！！お前は46時中俺のそばにいるのだからこれは嘘だとわかるだろ！！ホレまた火に油を注いじまつたって・・・おいおい怖いですよ皆さん。ここは落ち着きましようってぎゅ。俺の断末魔が学校中に響き渡った・・・。

きーん　こーん　かーん　こーん

そうこうしているうちに放課後になっていたな。俺は愛華を連れて生徒会室へ向かっていた。

1年生の教室は3階。生徒がいしつに行くには1階の3年生の教室を横切らなければいけない。入学当初は緊張していたが最近は慣れてきた。

がら がら がら

ドアを開けるとそこには佑介以外の生徒が集まっていた。早いな皆さんって俺が遅いのか??だったら小西さんはいつからここに??俺の後に教室でたと思ったのに。

俺が頭の上にはてなを浮かべていることを無視して会長は早く座るように行ってきた。

すみません……。小さくなりながら俺は定位置の席に座る。会長が立ち上がり宣言する。

「それではこれよりミーティングを開始する。松本、報告を頼む」

右隣に座る松本さんに指示する。俺達には松本さんから資料のような冊子が渡された。

なにになに??ああ、昨日の悪霊退治についてか。俺は軽くその内容を読んでいく。みなもそのようだった。そうして松本さんがホワイトボードになにやら地図を張りだした。

蒼陽市の地図だった。蒼陽市は日本で最も大きい都市でさらに恐ろしいことに心霊スポットもまた多かった。

「最近ですがここでは悪霊が大量に出現しています。ほかの学校の生徒会も対策に乗り出しているようですが一向に効き目はありませ

ん。これが何を示しているのかはわかりませんが、近い上来何か嫌なことが置きそうな気配がします。そのためにはこの異常事態が何を示しているのかを調査する必要があります」

「そこでわれわれで心霊スポットに赴き、何があるのかを調査しにいきいたいと思っている。もちろんほかの学校の生徒会の人と一緒にだ」

会長が腕を組みながら話す。花田さんは松本さんが張った地図になにやら印を付けている。

「花田さん??その印はなんですか??」

「は、はい。これはですね皆さんの守護霊が最も負の霊気を感じるという心霊スポットです。ざっと5箇所ですかねますかね」

変な日本語になりながら説明してくれた花田さん。戦闘中はあんなに強気なのに……。

俺の隣の小西さんはなにやら電卓を片手に計算しているところだった。どうやらその5箇所に行くのに必要な金額を出しているようだ。あまりの速さに俺は目を回しそうだ。

その後は普通の生徒会がするような仕事をした俺達。時間が6時になったので帰ることになった。そこに俺は会長に呼び止められた。「神崎くん、ちょっと話があるから残ってくれないかしら。そんなに時間はとらないから」

俺は分かりましたと3人が帰った後も残っていた。そこに会長とその守護霊のハクがやってきた。

「神崎くん、あなた昨日の戦いで途中気を失ってたらしけども・・・どうしたの??」

「なんですかねー突然知らない風景が目の前に現れて、阻止寺悪量化していた生徒が現れて・・・それはまだ生きていたときのものでした。なんだか好きな人がいたらしくて、最初は付き合って幸せでしたが、その彼氏が女たらしで振っちゃったんですよ。それがショックだったらしく・・・。そんなことを見ましたね。たぶん生徒さんの記憶だと思っんですけれどもね」

『うむ、お前にはなにやら特別な力がやどっているようだ。それがお前が手に入れたものなのか、それとも守護霊が持ったものなのか・・・それは分からない。しかしその力はかなり役に立ち。お前はこれから最前線で戦うことになるぞ!』

俺はその言葉に一瞬ビビッてしまった。それを見逃さないのが会長だ。

「びびるのは仕方がないわね。この前討手になったばかりなのに、いきなり最前線だなんて・・・。死に行けといってるもんだわ・・・。でもあなたがその力を持ったことは何か理由があるはずよ。だから覚悟を決めて欲しい」

真剣なまなざしで俺を見つめる会長。俺覚悟の前に会長の目に見とれてしまいますよ。そこにはこつと愛華にたたかれた。

『お兄ちゃん・・・またいやらしい眼になってた』

軽蔑するような目で見てくる愛華。おお、マイシスターどうかこんな兄を嫌いにならないでくれ・・・。

くすくすと笑う会長とそんな俺をあきれたようにみるハク。そしてジト目で見てくる妹。こんな風に何も起こらなければいいのに・・・。そんな淡い希望は簡単にくずされる・・・。

そして月日は川のように流れるって明日からは修学旅行だ。

俺達の学校蒼陽学園高等学校は京都・奈良の日本の歴史に触れる修学旅行を計画していたのだった。

俺の楽しみなのは小西さんとのグループ活動。ほかにも男子や女子がいるけれど俺には関係なくし！俺は小西さんと一緒にいらればもうしあわせ！わははは。

『お兄ちゃんが壊れた・・・グス・・・エグ』

どうしたんだマイシスター。お兄ちゃんはまだまだ健全だぞ。おい。

『お兄ちゃんは愛華のことが好きなんだよね??だよね??』

そんなにウルウルさせた目で見られたらいいぞ！お兄ちゃんも愛華のことが好きだよ（妹として）。

『だよね。おにちゃんも私以外に好きな人ができるなんておかしいからね』

けろりと機嫌を直してしまう愛華。まったくお前は扱いやすいんだよ・・・。ばれたら殺されるな・・・。

『お兄ちゃん・・・愛華のこと嫌いになったら・・・覚悟してね』

はい！！って覚悟してねって怖い表現に　つけてかわいくするなよ
な！！余計に気味悪いよ！！

まあそんなことはおいといて、俺はいつもの日課の素振りを終わら
せてから床についた。

明日からは修学旅行　ふふ　ふ　ん。　ここにさんとあんなことやこ
んなことって愛華も一緒に来るからたとえできても見られて殺され
る！！い　や　！！

翌日、いつもの日課を済ませて、前日までに準備していた荷物を持
って学校へ向かう。途中幼馴染の斉藤雫に会った。

彼女とは3歳からの付き合いだ。そのときはまだ親が仕事に成功し
ていなかったからいつも家にいたけれども・・・。

まったくあいつら今頃何してるんだか。嫌いにはなりきれない、そ
んな俺がここにいた。

「な　に　1人で詩人みたいになってるのかな？　似合わないぞ」

ば　つ　か、別にいいだろ？　と言うかお前と会うのは久しぶりだよな
？　？　2年な　つ　てから余りあわなかったしな。

「だって佑ちゃん生徒会に入っちゃうんだもん」

別に生徒会のせいじゃないだろ？　朝だって今までは一緒に行　つ　て
たんだしさ、2年な　つ　てから行かなくな　つ　たじゃん。どうしたんだ
？　？

「うっん、別になんでもない。でも今日は佑ちゃんに会えたからラッキーだな」

別に俺に会ったからその日がラッキーになるわけじゃ……。

「別にいいじゃない その人がそう思ってるんだからさ」

まあ、それなら仕方がないよな。

「そういうこと」

そうこうしているうちに学校についてしまった。俺達が住む愛知県からヒコークで行くことになっていた。だからいったんバスで空港に行かなければ行けなかった。

出発まで時間があつたので、乗り込んだ後に俺は昨日のことを思い出していた。それは同じ県の有名私立校聖セリア学園。女子高だ。ってなんで俺以外の戦う人って女の人なんだ??

「私は聖セリア学園生徒会会長峰岸脩子（しゅうし）です。そしてこちらが副会長木村彩香」

「副会長木村彩香です」

「わたしたちはあなたと同じく片腕を失いました。そしてこちら私の守護霊伸介です」

そこには中年の男性がいた。黒いコートを羽織ってこちらを一瞥し、口を開く。

『なんだよく見ればただのガキじゃねえか!!俺は手つきり女の子

が来てくれると思ってたのに』

なんだこいつは??ただの女たらしか??そういえばこの前の悪霊化した原因も女たらしの男だったよな。何だよお前は、別に俺だってお前なんかと会いたくなかったさ。俺はこちらのきれいな女性方とお話できればよかったんだ。

『んだとガキが!!』

ぶつた切るぞ守護霊風情が!!

「まあまあ、落ち着いてください。これでは話が進みません」

すみません。取り乱しました。

『フン!!』

なんだこいつ、そっちから振ってきたくせに。俺は怒りを何とか抑えて話を聞く。

「ここ愛知県には5つの強力な霊的スポットがあります。それらに取り付く親玉と言えばいいでしょうか。討伐することができれば何とかできるはずです」

副会長の木村彩香が懇切丁寧に教えてくれた。あ、ありがとうございます。このいただいた資料はこちらでも利用させていただきます。

「それと・・・」

生徒会長峰岸脩子みねぎし しゅうしさんが続けてきた。

「あなたたちが今度行く修学旅行なんだけれども、京都奈良にもいくつか強力なところがあるからそこに行って討伐してきてほしいの。わたしたちの学校もそこに行くはずだから。私たちの仲間ともうまくやってね。みんな女の子だから。あなただけが頼りなのよ 神崎佑介君」

思わず鼻血が出そうになりました。わかりました俺神崎佑介が皆さんに危害がないように精一杯頑張ります。

『ふん、こんなひよろつこにできるわけ』できるよ！！なんだって私のお兄ちゃんなんだから！！』『そうよ、唯一の男の子なんだから、頑張ってくれるわよ』ふん！！』

突如現れたのは彩香さんの守護霊。

『椿です。よろしく』

和服を着込んだ平安美人だった。そうこう回想してるうちに眠っていたようだ。俺達は空港へ向かっていた・・・。

現在飛行中であります。忌まれて初めての飛行機に俺も愛華も興奮を隠しきれなかった。

『お兄ちゃん、家があんなに小さく見えるよ』

ああ、そうだな。空から見れば俺達はちっぽけな存在だな。

『お兄ちゃんも感慨にふけてないで外見ようよ』

ああ、ちゃんと見てるさ。富士山が見える。

『わ、大きいね』

「佑ちゃん楽しそうね」

ああ、菜月か。こいつも俺の幼馴染の龍坂菜月^{たつさかなづき}。こいつも俺が3歳の頃からの付き合いで、何かとちょっかいをかけてくる。

「京都・奈良にはどこ行くの??」

金閣・清水寺・平城京跡・平安京跡・清明神社かな。

「結構いいところいくんだね。それに幽霊スポットの行くんだね」

幽霊スポット・・・そうだ。俺らが行くのは全部悪霊が住み着いているらしいところ。

さらにそこが親玉たちの隅かともうわさされている。負の力の中心となっている蒼陽市に攻めてこられたら・・・。

俺達どうなっちゃうんだろ・・・。それより人間生きてるかって話・・・。ああ・・・俺責任重大!!頭痛い・・・。

「佑ちゃんそんなに心配しなくてもいいんだよ」

いつものさわやかな声で話しかけてきたのはちょうど後ろに座っている小西さんだった。どうやら近くにいるフィオネが俺の気持ちを感知して、小西さんに伝えたのだらう。ありがとうフィオネ。グッジョブ!!

「どうしたの佑ちゃん??落ち込んだり、青くなったり、嬉しそう

「なったり。大丈夫??」

「大丈夫です小西さん。あなたの笑顔が俺にとっては万能薬ですから。」

「私も加勢するから大丈夫だよ」

『私だってお兄ちゃん守れるもん』

『くくく、妹ちゃんが嫉妬しているぞ、桜』

「愛華ちゃんかわいいね、大丈夫だよ。お兄ちゃんは取らないから」

「がーん!!俺撃沈??片思いは終わった??」

『やったー、お兄ちゃんはずっと愛華と一緒にだ』

「今はね・・・」

『??何か言った??桜』

『どうしたのです??桜。顔色が優れなさそうですが・・・』

「大丈夫だよ。ほら、いつもの笑顔」

あゝその笑顔を独り占めにしたかった。

「佑ちゃん!!私をほっておくとはいい度胸ね・・・」

ぎゃゝ菜月!!そんなに怒るな!!落ち着けませう。

「私はいたって冷静だよ??」

そんなわけないでしょ！！あなたがニコニコしながら迫ってくるときは決まって俺にとってはよくないことが起こるんですよ！！

「覚悟〜！！」

ぎゃ〜！！つとなんだ？？いつまでたつても襲ってこないの俺はつぶった目を開けてみると・・・。

「！！これって・・・」

止まっていた・・・。時が止まっていた・・・。

『お兄ちゃん？？』

愛華も困惑している。俺は愛華を傍に抱き寄せる。何でこんなときに顔赤くするんだよ！！

『お兄ちゃんが大胆だからだよ！！』

こんな大胆にも入りません！！

「フィオネ？？これは一体・・・」

『おそらくこの飛行機に取り付いて悪霊でしょう。このままではいずれ時間は動き出すかもしれません・・・墜落は確実です！！』

どういうことだ？？

『これに取り付いたのはかつて飛行機事故でなくなった人たちの霊です。すでに悪霊化してるのでしょ』

「確か・・・飛行ルートに心霊スポットがあった」

そうなんですか??小西さん。

「ええ、数年前に飛行機墜落事故で出来上がった巨大なクレーターがあるの。そこによく霊が出るそうで、行ったものは必ず乗り物事故に遭っている。これらはすべて、悪霊のせいだ」

わ〜ん、また小西さんが人変わっちゃったよ。ってそれよりどうすればいいんですか??

「ここに花田先輩から借りてきた御札があるからこれを遣って悪霊たちを誘き出す。その後はやつらを討伐すればいい」

了解しました!!愛華!!

『了解、お兄ちゃん』

そういうと愛華は俺に刀『牙狼丸』を渡した。うん、今日も右手のしつくり来る。

「それでは行きます」

ああ・・・無機質な小西さんに声が飛行機内の木霊する・・・。数枚の御札を周りに投げる。すると次の瞬間俺達は恐怖のどん底に落とされる・・・。

「なんなんだよこいつら・・・」

俺達の目の前に現れたのは原形をとどめていない人間だった悪霊たちだった。それもものすごい数だった。

こんなの相手できるのか?? 2人だけで・・・。

「小西さん、どうするんですか?? こんな数じゃ俺達だけじゃなんとありませんよ」

「こんなところであきらめてたら立派な討手にはなれない」

無機質な声が放たれる。俺は別に討手になりたかったわけではない。

「それに全滅させなければ生者の魂が食われてしまい、やつらの仲間になつてしまう。それでも佑ちゃんとは戦わないのか??」

そんな・・・ここにみんなは修学旅行を楽しみに来てたのに・・・こんなやつらに潰されていいはずはない・・・。

「愛華・・・力を貸してくれ・・・」

『オツケー。お兄ちゃんの言うことなら何でも聞くよ!!!』

ははは、それはどういうことかな?? 俺は刀を受け取り構える。小西さんもすでに構えから走り出していた。悪霊の数は・・・。

『100体です!!!』

小西さんの守護霊のフィオネの声がする。どうやら計算してくれていたようだ。まあ、小西さんの計算能力は生徒会でも活躍しているからな。

「よっしゃー、俺がまとめて手前らを救ってやるぜ!」

俺は駆け出して愛華の生の靈気を刃に滑らせ、悪霊たちを切っ
てく。

...

どれくらい経っただろうか……。俺と小西さんはすでに体力の
限界だった。何とか半分倒せたが、まだまだごちゃごちゃいやる。
これじゃあ限がねえ。

「ここは1発あれをぶちかますか??」

しかしあれは愛華に対するダメージも大きい。半日は休んでい
ないと回復しないくらい大量の靈気を消費する。しかし・・・この状
況を打破するにはそれしかないのではないか??俺が悪霊たちが迫
っている中迷っているのを小西さんは・・・。

「それでは私も加勢するよ、佑ちゃん」

無機質な声で頼もしいことを言ってくれる。しかし小西さんには俺
と同じようなことはできるのか??そんなことを考えていると。

「私の刀だって佑ちゃんとどうクラスの業物だよ。できないわけ
ないよ」

おおーなんと頼もしいことを言ってくださる。それなら俺は半分の
力で放つことができる。

「私と同時ににはなってくれん??」

お安い御用ですよ小西さん。愛華に確認を取ると愛華もそれに賛同してくれた。何度も愛華ばかりに負担かけたくないからな。

「フィオネ！！」

小西さんが守護霊のフィオネを呼ぶと、戦っていたフィオネは自らの剣と同化して小西さんの目の前に突き刺さった。

でもよく見ると剣の刃だけが残っていた。小西さん！！刃だけじゃ何にもできませんよ？

「心配は要らないよ、佑ちゃん」

そう言つて自らの刀を1度鞘に戻し、再びぬくとそこには柄だけが残っていた。刃が消えていたのだ。一体なんなんだ小西さんの刀は！！

「フィオネはきつと同化能力を持つ守護霊なんだよ。きつとあれがフィオネの特殊能力。そして私の能力は悪霊たちの悪量化した原因を知ることができる能力。それがこの前発動したんだよ」

なるほどな。それで納得。それじゃあほかにも色々な能力をもつ守護霊がいるんだな。

『そうなるね。それよりお兄ちゃん。そろそろだよ』

哀歌の言葉に俺はすぐに反応し、鞘に刀を納め、抜刀の構えに入る。

「我と契約し守護霊の名はフィオネ、我の刀と同化し、悪の根源悪

霊を滅する力をわれに与えたまえ!!」

かつまばゆい光が機内に放たれる。俺も目をあけていられなくて思わずつぶつてしまう。そして光が収まった目の前には青く輝くレイピアを握った小西さんがいた。あれはフィオネがもっていたものと似ているが柄は日本刀だ。空中に浮いている青い発光体を破壊するとそれは霧散した。

「霊剣・『竜神丸』」

あれが小西さんの武器の本当の姿。青く輝くレイピア。一体どんな力が秘められているのだろうか。

そんなことを考えていると小西さんはすぐに突きの構えを取る。俺もあわてて精神を集中する。

悪霊はすでに周りの生徒は無視して動いている俺と小西さんにターゲットを合わせたらしい。ゆっくりと近づいてくる。聞こえる・・・。彼らの声が・・・。

「たすけて〜」「熱いよ〜」「痛い!!腕が〜腕が〜!!」「ママが〜!!パパが〜!!うわ〜ん」「操縦不可能!!うわ〜ん」「落ち着いてください!!きゃ〜」「いたい、冷たい」声が混じって聞き取れないものもある。

「でもよ・・・」

俺はかつと目を見開いた。愛華の霊気を刀に乗せて。

「俺がお前らの魂を・・・」

小西さんも突きを放った。俺も神速の抜刀をした。

「俺がお前らの救われなかった魂を救ってやる！！」

刀からは白い・・・銀色の波動が繰り出された。レイピアからは青い槍状の光が放たれた。それらは悪霊たちを飲み込み、突き刺す。

「白銀狼斬！！」「蒼槍竜雨！！」

悪霊たちの最後の叫び声が、時間の止まった機内に木霊する。そして、死の直前の姿となり、俺達を一瞥し消えていった。

小西さんの隣には激しく疲労している騎士のフィオネがいた。俺の隣には同じく疲労している妹の愛華がいた。前よりは軽そうだが、それでもきついらしい。

「お疲れ愛華。今回も大変な目にあわせてごめんな」

『大丈夫だよ。お兄ちゃんを守るのが私の役目だから』

そうだなっ　と心の中で言いつつ、笑顔を返す。きっと愛華ならわかるだろう。証拠に笑い返してくれた。

「これから会長に連絡し、事故現場の除霊をしてもらえるように言っておく。佑ちゃんはもう休んでいいよ。時期に時間が戻ると思うから」

そう言い残して小西さんは後ろに消えていった。その後時間は動き出して、一件落着に終わった。しかし俺達は気づいていなかった。

すでに1人魂を食われた人がいたなんてことを・・・。

後日談だが例の事故現場の除霊は花田さんの知り合いの人がやってくれたそうだ。俺達の楽しい修学旅行・・・今後どうなるのか・・・。
今はゆっくりと眠りたい。京都まであと1時間・・・。

どたばた騒ぎとミッションイン修学旅行〜飛行機編〜（後書き）

コメント待ってます!!!!!!

ミッションIN修学旅行 旅館編

ようやく着いた京都。ああ、歴史を感じるな。

「!」

なんだ??今の悪寒……。まるで誰かに見られた感じのものだった。愛華も何も感じていないようだ。

「一体なんだったんだ??愛華、今なんか悪霊みたいな奴いなかったか??俺悪寒感じたんだけど……」

「私は何も見てないよ??お兄ちゃんまさか風邪引いた??」

どうやら俺の奇遇らしい。考えすぎか……。たはは……。

「大丈夫だよ。ちょっと疲れただけだから。修学旅行に着たのに風邪で4日も旅館で寝てるだなんて笑えないよ」

「そうだね。楽しい就学旅行にしたいね」

そうだな。俺は笑って頷く。

「だからってお兄ちゃん??」

。なんだか愛華の牛え尾に何かどす黒いオーラがあるんだけど……。

「大人の階段上っちゃだめだからね。やるならってむぐむぐ」

俺はとつさに手で愛華の口を押さえた。周りから見れば空に手をかざす高校生だろう。しかしそれを聞いていた小西さんとフィオネはくすくすと笑っていた。ああ、小西さんに軽く振られたばかりだといふのに……。しくしく……。

「どうした？？神崎。具合でも悪いのか？？」

どうやら空港で壁に手を当てて暗い顔してたから体調不良と思われたのだろう。担任の水谷銀一郎が心配そうに聞いてきた。

なあ、に大丈夫ですよ先生。俺はこれでも鍛えてますから。今のはちよつと思ひ出し憂鬱ですよ。よくありますよね、あつはつはつは暗くなったり、突然明るくなるものだから先生は軽く引きながらわかった、ホントに体調不良なら言うんだぞつと言ひ残し、持ち場に戻った。

俺達はその後、空港からバスに乗り旅館へといった。なんとも古風な旅館だった。そこには同じ愛知県からの学校も着ていた。相互関係を結んでいる高校の1つ。希望ヶ原高等学院学校だった。中にはこの前あった女子生徒もいた。あ、もちろん俺以外にも男はいたぞ。かなりキザツタらしいやつだったけどな。あいつのせいであのくそ守護霊のことを思い出しちまった！！くそ~~~~！！

その後は各自自由行動をとった。俺は小西さんとともに自由ヶ原の討手と会合を開いていた。もちろん守護霊も一緒だ。

「改めまして、私は唐沢美野里といいます。よろしく願ひします」
なんとも特徴的なアホ毛がびよこびよこ動くのがなんとも萌え〜。

そんな俺に抱きついたのは彼女と瓜二つの女の子。

『久しぶりだね、お兄ちゃん』

彼女は唐沢さん・・・じゃなくて美野里の守護霊小百合。美野里の双子の妹だ。どうやら小学時代に悪霊に殺されたらしく。そのとき来ていた、討手によって守護霊にされたらしい。見分けがつかないほど似ているが、1つだけ決定的な違いがある。それはアホ毛が右に向いてるのが姉の美野里で左に向いてるのが妹の小百合なのだ。何で名前で呼ぶって??それはだな・・・。

「佑介」

こうやって俺にくつついてくるのだ。こんなかわいい高校生がくつついて来たら俺・・・もう燃えしやなくて萌え死んじゃう・・・。

『お姉ちゃんとお兄ちゃん仲いいよね』

小百合も姉を応援する。俺も最近心が揺さぶられ始めてるのは事実だ。横からまたもやどす黒いオーラが・・・。

『お兄ちゃん???』

愛華の存在を忘れていた!!

『何で私を忘れるの???うえーん えーん』

あゝ、とうとう泣き出しちゃった。こうなると手が付けられないんだよな。

「大丈夫じゃい???レディー。こんなかわいい子を泣かすなんてこ

の男は人間じゃない」

キザッタらしい、女たらしのお前には言われたくない。

「君よりは女性に信頼されていると思うよ。君の守護霊だって僕のコレクシヨンの1つにしてあげてもいいんだよ?? もっとも希望ヶ原の女子生徒の心はすべて僕のものさ」

「何言ってるの?? 私の心はあなたではない別の人にあるの!! ね
佑介」

あはは、うれしいね。俺もう幸せ。

「そんなことより明日からの行動の打ち合わせをしましょう」

小西さんの無機質な仕事モードの音が響く。あ、振られたからな。
ガックシ……。

『この旅館は昔自殺した客がいたらしいです』

フィオネ?? いつの間に調べたの??

『旅行前日までに京都とならで起きた事件・事故などをすべて調べました』

『それなら僕チンもやったよ』

なんだかガキが出てきやがった。こいつはガキに見えても立派な守護霊らしい。なんでも生前はお坊ちゃまだったらしく、こいつ……黒金輝弥の権力と金に惹かれたらしい。こいつも金持ちらしいから

な。

「ふふん、僕の操る式神でちょいっと済ませちゃいいんだよ」

ふん、討伐が簡単に行くとは限らないぜ。最近の手ごわくなってきたからな。

「それは君が弱いからじゃないか??君の守護霊は特に強い気がしない。はっきり言って役立たずだね」

「『!』」

俺は切れた……。頭に血が上った……。いつの間にか俺は輝弥の胸倉をつかんでいた。

「てめえ、いいたいほうだいじゃねえか……。最初に躍らせておいて、最後はドスンと潰すか……。最悪のやり方だ……。そうやって女の子たちに自分を嫌われないように差し向けていたんだろ!!それをお前はみんなの心は僕に向いてるって言ってるんだろ??くそやろ!!そうやって悪霊になった女の子だっているんだぞ!!泣いてたんだぞ!!お前のやりアk他では最後には最悪の展開が待ってるぞってぐは!!」

俺は思いっきり小西さんに殴られた。見下したような眼をしていた。

「何すんですか!!ぐは!!」

「お兄ちゃん!!」

泣きながら愛華が俺によってきた。何泣いてるんだよ……。俺は

平気だぞ??

「佑ちゃん??ここは喧嘩をするところじゃないんだよ??分かってる??」

なんだよそれに言い草・・・。それじゃあ、悪霊化は進む一方だぞ??それでもいいんですか??小西さん。

「だからそれをとめるために私たちがいる。違うか??」

なんだよそれ・・・それじゃあこいつのやってること・・・認めるんですか??

「これが彼の性格なら仕方あるまい。私は目をつぶろう」

「・・・ごめんなさい。私も仕方ないと思います」

なんだよ・・・小西さんだけじゃなくフィオネも美野里も小百合も・・・。

「愛華は??愛華はどうなんだ??」

愛華なら俺の味方になってくれる・・・はずだったのに。

『私も仕方ないと思う』

終わった・・・。俺はがつくりとその場に崩れた。それに合わせて俺はやつに頭を踏まれた。

「これで分かったか??俺の力・・・。それは女の子の心を捕らえることができる力なのだ!!」

当たり前だ……。何判りきったことを言うんだ……。

『汝……。うるせー!!』

俺は吼えた。あまりに分かりきったことなので馬鹿らしくなったのだ……。

「欲しいに決まっている!!俺は力が欲しい!!」

『なら……。何のために……。』

「!!」

『貴様の仲間はすでに己の欲におぼれ……。もがき……。そして散っていった。これまで何人もやつがそうだった。汝はどうだ??』

突然試すような口調に変わった。みんなやられただって??みんなつて……。まさか!!

『そんなことよりも貴様が答えを出せば仲間は救われる……。』

野郎……。

『今再び問おう!!貴様はなぜ力が欲しい??』

俺がなぜ力が欲しいのか……。何で??なんで??ナンデ??……。とりあえずは目をつぶる……。浮かんでくるのは……。庭??なんだ??この昔じみた庭は。でもなんだか懐かしい……。つと誰か来た。

「またいらしていたの・・・殿」

女の人だ。きれいだった。心が奪われるくらいきれいだった。

「あなたの笛を聞かせてくれませんか??」

笛??

「あなたと共に・・・に乗って天を駆けた昨日はとても楽しかったですよ」

空飛んだんだ・・・。ってどうやって??

「あなたの・・・」

待ってくれ!!あなたは一体誰なんだ??

「また楽しい夜をすごしましょう」

う!!まぶしい!!目が開けられない!!俺は白銀の光の先にいる男の最後の言葉を聞いた。

「さあ、参りましょう・・・さくら（・・・）姫」

「!-!」

俺はわかった・・・。分かっちゃった・・・。わかったんだ・・・。ここで3段活用・・・。空気読めよコラ!!
だからここに誓おう・・・。

「俺が守りたいのは小西 桜ただ1人だ~~~~!!」

突然体が軽くなったのを感じた……。俺は浮いてるのか?? 無重力ってこんな感じかな?? 感じたことないけれど……。

「汝の誓い……。確かに受け取った……。貴様にこれを渡そう……。いつか使う日が来るだろう……。だから今は……。貴様の心に埋め込んでおく!!」

「!!!」

突然化け物みたいな声が変わった!! やばいと思った瞬間俺は意識を失った……。最後に見たのは白銀の体を持った巨大な怪物だった。ああ……。やつがこれを俺達に仕掛けていたのか……。俺は……。

はっと目を覚ますとすでにベットの中だった。隣には同じ部屋のやつがグースカ寝ていた。どうやら夢だったのか?? それなら今まで俺は何をしていたんだ?? 確かに俺達は会合を開いて……。一体あれはなんだったんだ?? まあ、明日になればすべて分かるだろう。そう思いつつ俺は再び眠りについた。

ミッションIN修学旅行 旅館編（後書き）

コメント待ってます!!!

ミッションIN修学旅行 金閣寺編

俺はいつもよりも早く起きてこっそりと外に出て、花田さんから貰っていた決壊用の御札を展開して刀の素振りをしていた。昨日のことを愛華に聞くと愛かも同じことを体験し、何でも俺にも裏切られてそこで気を失ったらしい。俺もお前から裏切られたときは悲しかったぞ。

『私はそんなことしないよ。お兄ちゃん、信じて』

そんなに目をウルウルされると首を縦に振るしかできないじゃないか、まったく。

「分かってるよ。俺達は信じあう兄妹だからな」

『うん!! そうだね!!』

はじける笑顔で言う愛華。俺の中に埋め込まれたものって一体なんなんだ??

『私にも分からないな。何か大切なものじゃないの??』

だといいな。今後に役立つものならいいんだがな……。その後も俺はさまざまな剣術を試していた。滝のような汗をかいて、朝風呂に行った。こっそりと混浴に言ったのはみんなに秘密だ。何せまだ5時ごろだからな。ほとんど起きてないだろう。愛華にはいくなと散々文句を言われたが、ここはスリルを味わいたいので俺は行った。

ガラガラとドアを開けて、腰にタオルを巻いて俺とバスタオル姿の

愛華が入った。中には誰かいる気配がした。

「おはようございます、朝早いですね」

俺は挨拶をしながらその影に近づいたってプー！！鼻血が飛び出した。だって風呂にいたのが・・・。

「あ、おはよう。佑ちゃん、昨日はお互い大変だったね」

小西さん……。あなたって人は……。きらめく白い肌。バスタオルで隠れる福与かな胸。上気して赤くなり、かなり色っぽい顔……。俺……。もう死んでもいいです。

「お兄ちゃん！！エッチな目で見ないで！！」

おおっとマイシスターよ！！これは健全な男なら仕方が無いことなのだよ！！これを止められてしまうと男と言うのはだな……。

「あなたもやはり男ですね」

ん？？どうしたんだフィオネって小西さんも愛かもなんで真っ赤にして俺を見てるんだ？？ってうわー！！どうやら力説してたらタオルがはらりと取れてしまい……。

「『キヤー！！』」

2人の悲鳴がとどろいた。しかし聞こえた人は皆無だった。この後俺は3人分のコーヒー牛乳を買わされた。体のほうはかなりやばいことになってたな……。

つといるんなことが朝からあったが今はグループ活動の真っ最中。俺達は最初の目的地、金閣寺に来ていた。

「本当に金ぴかですね」

関心して言うのはクラスメートの芳賀隆介だ。確かに金ぴかだ。昔は本当に金が使われていたんだろ？な……。今はそうではないが。「シャッターチャンス！」

写真部の芝達也だ。マニアらしく、被写体があればすぐにシャッターチャンスしてしまう癖があり、それにより検挙されることがたびたびある。警察ももうあきれられるしかできないようで、その場で注意して終わりと言う形が最近であるようだ。

金閣を一瞥して周りを見ると池に移る金閣を凝視する小西さんとフイオネがいた。どうしたのですか？？小西さん。俺が尋ねるといつもの仕事モードの小西さんがつぶやく。

「この池の金閣には悪霊が住み着いている」

本当ですか？？なんで？？

『金閣はかなりの資産で建てられたのでしょ、おそらく金に苦しんで死んでいった人々の恨みが住み着いているのだと思います』

真剣な表情で説明してくれるフイオネ。了解。それじゃあそうすればいいんですね。

「やつらをおびき出すしかないかもしれない。しかしこのままでは一般の人にも被害が出てしまう」

『しかしこのままほうっておけばさらに凶悪な悪霊になる可能性もあります。あの2人もまた別のポイントで戦闘を開始しているようです』

昨日のことは今朝聞いてみたが2人もまた愛華と同じく裏切られた瞬間気を失ったらしい。あ、小西さんは答えたところまでは覚えているがその後すぐに気を失ったらしい。お礼外にも答えを言うところまで行く人いたんだな。

「もう、腹をくくるしかないようね。佑ちゃん構えて!!」

よし!!了解!!小西さんは懷から御札・・・ではなく4色の色紙でできた人形を持って走っていった。どうやら東西南北に設置しているようだ。人形は・・・竜・鳥・虎・亀だった・・・。まさか!!

「4方に宿りし聖獣よ。悪の根源をこの地にひれ伏せさせよ!!北の朱雀!!東の青龍!!南の玄武!!西の白虎!!」

次の瞬間4色の光が金閣周辺を包み込んだ。一般客は驚き逃げ惑う。クラスメートは逃げるところか気絶している。唯一芝だけがシャッターチャンスしていた。

地を揺さぶるような咆哮をとどろかせ、出現したのは、幾人もの人間が埋められた、獣の形をした悪霊だった。モデルはライオンか?でも、埋め込まれている人間からも悲痛のうめき声が聞こえて来る。

「これは・・・」

『レベルBですね』

レベルがどうだか知れねえ画、今までのやつよりは強いということですね??俺の質問に無言で首肯する小西さん。だったら……。

「愛華!!」

『了解!!』

俺は愛華から『牙狼丸』を受け取り、霊気をまとわせ、構える。小西さんもすでに戦闘準備完了だった。愛華と違い、騎士のフィオネもある程度は戦えるのだ。

悪霊から感じられるどす黒いオーラを感じ冷や汗が流れる。ぴちゅんと俺のほほから流れ落ちた汗が地面についた瞬間俺達は駆け出した。

「俺がお前らの魂を救ってやる!!」

金閣での戦闘が今始まった……。

どがん どがん どがん

悪霊が吐き出す漆黒の炎をかわしつつ、刀に霊気を纏わせ、悪霊を切る。切られるたびに悪霊は奇声を上げ、人々は昇天していく。しかし斬っても斬っても中からは人間の形をしたものが出てくる。どれだけ金に苦しんだ人がいるんだ。

「小西さん!!こいつは一気に全体をぶっ飛ばさないといけないんじゃないか??」

「そうだね。やるしかない！！フィオネ！！」

『分かりました』

小西さんはフィオネが合わさったレイピアを持っていた。俺も愛華の靈気を半分刀に流し込み、抜刀の構えを取る。周りにはすでに非難したのだろう、人は誰もいなかった。悪霊は俺達を睨みながら攻撃態勢に入っていた。溜技だ！！
ここからは力と力の勝負だ！！

「白銀狼斬！！」「蒼槍竜雨！！」

俺の刀からは銀色の波動が地面なけずりながら、小西さんのレイピアからは青い槍状の攻撃が悪霊に向かって飛んでいく。悪霊も口からどす黒い炎を吐き出した。攻撃同士がぶつかり合い、閃光があたりを照らす。

「うおおおおおおおお」

かた かた かた かたと刀とレイピアが唸る。少しづつ足が押さ
れているのに気がついた。俺達は押されているのか？？

『お兄ちゃん！！』

心配無用だ！！お兄ちゃんは負けない！！そのとき俺の心臓が何か
がドクンと大きく鼓動したのが感じられた。何かが俺の中に流れ込
んでくる・・・。

『汝・・・我を求めるか？？』

あのときの怪物か??

『いかにも、汝にはすでに守護霊がいるので我は具現化されない』

そんなことよりも力を貸してくれるのか??

『汝は私の主なり。汝が必要となればわれの力、今はわずかだが、貸すことは可能だ・・・』

よし!!それなら俺にお前の力を貸してくれ!!

『よかるう・・・。私の力しかと汝に渡した・・・』

ところでお前の名前はなんていうんだ??

『我は白銀の竜王なり。名はまだない』

ならギンでいいかな??呼びやすいしな。よろしくギン!!

『よかるう、私の名はギン・・・。我は汝とともにいる・・・』

刀に纏わせている霊気があがったのを感じた。愛華だけではなく、ギンの霊気も含まれているらしい。これなら何とかいけそうだ。俺は直感で感じたやり方をとる。

「人の闇より生まれ、人の心を食らうもの、陰と陽との調和のもとに、我が描きし5望星によりて無に返す、悪霊滅すべし!!」

俺は刀で5望星を描く。そこには白銀に輝く星が出来上がった。そして上段に構えたまま、振り下ろした!!

「封星龍破！！」

星の中からは白銀の龍が現れ、悪霊を食らっていく。悪霊は今までにない悲鳴を上げて、最後のひとかけらも残されずに龍に食われた。

『お兄ちゃん、いつの間にそんなことができるようになったの？？』
愛華が感心しながら聞いてきた。お兄ちゃんもぶっつけ本番でやったんだよ。直感でやつかな・・・。

「それならすごいというしかありません」

小西さん？？

「龍は聖獣の1つ、青龍をあらわします。あなたがそれを操ったことは何か理由があるのでは？？」

確かにあつたっちゃあつたんだが・・・。言っているのか？？

「ないようならば才能でしょうか・・・。しかし大変なことになりますね佑ちゃんも」

なんでだ？？俺は今でも大変だけれども。

「強大な力を持つ討手は政府直属の機関に配属されるのです」

配属？？政府直属の機関？？なんすかそれは？？

「そのことならば、学校に戻り次第、会長じきじきに教えてくれると思うよ。がんばってね佑ちゃん」

何と言うか・・・また大変なことに巻き込まれそうだ・・・。すると俺の手元でピキピキと何かの音がした。見てみると・・・。

「な・・・なんだと!!」

『お兄ちゃんこれって・・・』

俺の愛刀・・・『牙狼丸』にひびが入っていたのである・・・。これは・・・どうしようか・・・。俺はただ見つめることしかできなかった・・・。

ミッションIN修学旅行 金閣寺編（後書き）

コメント待ってます!!

ミッションIN修学旅行 清水寺編

俺達は今清水寺に来ている。『牙狼丸』にひびができちゃったからには小西さんかなり負担がかつちまう。それも俺が弱いせいだ・・。くそ！俺は近くの木を叩く。愛華はそれを心配そうに見てる。そつとしておいてくれるのは彼女なりの気遣いだろう。小西さんも気にするなといってくれた。フィオネもそうだった。

「しっかし高いですね」

「ここから薮で飛び降りれるかな??」

おっかないこと言わないください。あれは昔話ですよ。それにしてもここにも悪霊がいるんですか??

「なんでも落ち武者が集まってここで大量自殺したことがあるらしく、その霊が最近になって活発になっているんだ」

具体的には??

『ここで自殺する人が増えてるんです。今年に入ってもう20名。なんでもなかった人が突然体調を崩すところから始まるらしく、そこから坂を転がるようなものですね・・・』

「それも悪霊たちのせいなんですね??」

「そう、彼らは仲間をあつめている。一体何をしようとしているんだか・・・」

愛華は何か感じるか??

『特に何も感じないね。守護霊たちも疲れてる。相当悪霊の力が強いんだね』

『悪霊が守護霊に変わって後ろに付くために自殺者が現れるのです』
それなら早く何とかしなきゃな。罪もない人が夢を奪われていく・・
・。そんなのはだめだ!!

『愛華も頑張るよ!!お兄ちゃん』

おっし、期待してるぜ!!愛かはえへへと屈託もなく笑った。

「それでは術式を組み立てます」
そう言つて子に試算はいつもの悪霊を呼び寄せる術式を発動した。

ドカーン!!

大きな爆発音が響く。どうやら下かららしい。来訪者はあわてて逃げ出している。同級生の姿もいる。何とか無事でいてくれよって・
・ん???なんだか生徒たちの中になにやら変な感じを持つ奴がいたな・・・。気のせいかな??

「佑ちゃん!!来るよ」

おっし!!『牙狼丸』もう少し頑張ってくれよ。刀はカタカタと弱弱しく動いた。愛華!!

『オッケー!!!』

愛華の正の靈気をまとわせる。まだ大丈夫そうだな……。でも龍の力は使わないほうがいいな……。

「あちらから援軍が来るようだよ！！それまで頑張ろう！！」

分かった！！ところでこいつのレベルは？？

「こいつらは……。レベルDが多すぎる！！なんて数を集めてるんだ！！」

いちいち気にしてても仕方ねえな！！俺は知って悪霊たちの群れに突っ込んだ。

「俺がお前らの魂を救ってやる！！」

切って切って切りまくる……。倒しても倒してもきりが無い。次から次へと集まってくる。まるでゾンビだな。

「蒼槍竜雨！！」

小西さんは方で息をしながらもレイピアを振り続ける。威力は落ちてくるものの範囲は変わらない。連射して何とかしている。それでも限界が来る……。俺も使いたいことは山々だが折れてしまったら……。そんなことしてるうちに俺達は落ち武者たちの攻撃で切り傷だらけになる。血を流しすぎた……。意識が朦朧とする……。援軍は？？まだなのか？？

「痛い……。痛い……」
「戦は……。終わった」
「最後まで殿に忠誠を……」
「なんでこんなことに……。？？」

「成功までもう少しだったのに・・・なんでこんなときに体調が・・・」

声・声・声・・・悪霊たちの生前の声。悲しんで死んでいる。こ
こは悲しみの舞台・・・きらりと光るものが飛んでくる・・・。
俺達はそれが何なのかを確認できない。悪霊たちによって押しつぶ
され、そこからせいの霊気を奪われているのだ。愛華はどうやら必
死に俺を助けようとしてるようだ・・・何やってんだ・・・俺は
これで・・・。

『終わるのか??』

ギンか・・・もう頭にポジティブが浮かばねえ・・・。

『負の霊気に負けるなんて・・・それでも守るといつて者の姿か？
?』

助ける・・・たすける・・・タスケル・・・。

『俺が守りたいのは小西 桜ただ1人だ・・・!!』

そうだ・・・俺は言ったじゃないか!!小西さんを守ると!!

「くっそ~~~~!!」

俺は残っていた力をすべて刀にこめた。さらにギンの力もこめて・・・。
そして叫ぶ!!刀が折れようが砕けようが愛する人を失うほう
が辛いんだ!!

「封星龍破!!」

銀色の龍が悪霊たちを食らっていく、刀がきしむ……。もつてくれ！！ギンでも殺すのに時間がかかる。俺達に地価空く悪霊たち。しかしそこに来たのは。

「風魔の矢！！」 「武神・ヤマタノオロチ！！」

唐沢美野里と黒金輝弥だった。助かった！！

「ごめんなさい！！こちらでも苦戦したもので」

「僕は余裕だったよ。小西桜君を助けにつて気絶してる」

バーカ。何１人でうなだれてやがる。そうこういつてるうちに俺のギンと美野里の矢、そして輝弥の武神によってすべて昇天させた。

「小西さん？？大丈夫ですか？？」

俺の問いかけにも答えない。どうやら本気で気絶したらしい。霊気取られすぎたのかな？？

「お疲れ様です。吉川さんには私から連絡しておきますね」

スイマセンね、何から何まで……。

「いいんですよ、あなたたちが傷ついてしまったのはこちらの援軍が遅れたからなのですから」

でもきてくれたからいいんじゃないですか？？

「それは助かったからいいですけども、もしかするとあなたたちは殺されていたかもしれないですよ？？それでもいいなんてい

えるんですか??」

それは・・・その・・・。

「そこまであなたが気を使う必要はないんですから。あなたに今しなれると私たちが大きな責任を負わなければいけないんですから」

大きな責任??

「あなたはこの修学旅行の後専属機関『ガイア』にはいる人なんですから」

『ガイア』??そういう名前なんだ。

「『ガイア』は最強の討手たちの集まりだ。手をぬくと殺されるぞ??お前のようなひよろひよろはすぐに死ぬ」

そうかい・・・。忠告ありがとう。

「へっ!」

「それよりも小西さんはどうする??フィオネも力尽きちゃったらしいし」

俺がおぶりますよ。大丈夫です。俺は力ありますから。

「そう??それじゃあよろしくね」

そうして俺達8人は清水寺を後にし、最も危険な清明神社に向かっ

た。
俺の刀はもう限界だった。
・
・
・。

ミッションIN修学旅行 清水寺編（後書き）

コメント待ってます!!

ミッションIN修学旅行〜清明神社編〜

バスやら徒歩でやってきたのは清明神社。同級生とははぐれてしまい、電話でどうせならもう自由行動してしまおうということになり俺達8人は清明神社に来ていた。相変わらず小西さんは気を失ったままだ。中には多くの観光客がいて賑わっていた。

「こんなところにも悪霊が住み着いてるのか??ここ陰陽師がいたところだろ??」

「確かにそうですね。ここに悪霊はいますがそれは封印されたものです」

「封印??」

「ああ、安部清明が命を賭けて封印に成功した悪霊がここ清明神社にいるらしい」

『僕チンが調べただけどね、あそこにある大きな岩に封印されてるらしいよ。岩に色々と御札が張られてるからね。でも長い年月をかけて毎回貼られていた御札も陰陽師がいなくなっただけからお粗末にされているらしいよ』

『だからいつ封印が解けてもおかしくないの。それももうすぐとかれる可能性もある』

「どうしてそんなことが分かるんだ??」

「あれをってみろ」

輝弥の言葉に俺は振り返る。岩に張られているのはたった1枚のぼろぼろの御札。

「あれが剥がれたら・・・」

『きっと悪霊が復活するよ・・・お兄ちゃん』

愛華が不安そうな顔で言ってくる。そうだな、何とかしなきゃな。

「それにしてもどうするんだ??」

「やることは1つだよ」

「あれをはがして俺達が殺すまでよ」

あつさりと恐ろしいことを言ってくれますね。そんなことが可能なのか??あの清明でさえ命賭けたんだろ??そんなやつに俺達ガキがかなうのか??

「俺達はこのために来たんだ」

「怖いんだつたらそこで見ててね。私たちでやるから」

なんだよ・・・。お前ら怖くないのか??死ぬかもしれないんだぞ!!

「怖いさ!!逃げ出したくなるくらいにな!!それでもやらなければいけないことはあるんだ!!それをいい加減に見極めろ!!それでも力を持つものなのか??お前は俺達の持つことができない龍の力を持つ。そんな力があつたなら俺が『ガイア』に入ってるぜ!!

お前は今みすみす倒すチャンスを逃し、多くに人たちを悪霊化させる気なのか??どうなんだ神崎佑介!!」

『お兄ちゃん・・・』

愛華は俺の傍にいてくれるか??怖いんだ今めちゃくちゃ・・・。

『私はお兄ちゃんの守護霊だから当たり前だよ』

そうか・・・。ありがとう。それなら俺がやることは初めからそれしかなかったってことだよな。

『汝力を求めるか??』

くれよ力を・・・。この世界の人々を守るための力を・・・。そして愛する人を守るための力を!!

ごろ　ごろ　ごろ　ピッシャーン!!

突然晴れていた空に雷雲が現れ。狙ったかのような雷が封印の岩に激突した。そして悪夢の始まりだった。

「封印の御札が・・・」

炎で焼かれて灰になった・・・。そしてこの世の叫びとは思えない声が響き渡る。観光客は驚き逃げ惑う。そして岩が崩れ下から現れたのは鎖につながれた大きな鬼だった。

「うおおおおおお」

鬼は叫び声を上げて、封印の道具の1つだろうか、鎖を力任せに引

きちぎろうとしていた。

「いくわよ!!」

『了解!!お姉ちゃん』

美野里の声に反応する守護霊の小百合。光り輝く弓矢と同化した。彼女は鬼に標準を合わせて矢を放つ。

「炎魔の矢!!」

矢が刺さったところから紅蓮の炎が噴き出し鬼を焼いていく。

「俺も加勢するぜ!!」

『僕チンもやるよ!!』

輝弥とその守護霊の裕が鬼の前に立つ。

「式神・狼!!」

紙から出てきたのは真つ黒な狼だった。それは鬼に向かって突っ込んでいき、首の辺りを噛み切った。

「おおおおおっおお」

どうやらあの鎖でほとんど力が制限されてしまってるらしい。今回は楽勝と思っていた。俺達6人は。。。

正直に言おう・・・甘かった・・・。清明神社には俺と輝弥しか立

っていない。先ほどまで一緒に戦っていた美野里は精神力の限界で倒れてしまった。俺の刀もすでに折れる寸前。輝弥の式神も次々と破壊されていく。

「くそ！！強すぎる！！」

輝弥がとうとう痺れを切らした。落ち着け輝弥！！こんなところで切れてたらやつと思う壺だ。

「バカいつてんじゃねえ！！あいつの封印は完全に解かれちゃったんだ！！あんな強力なやつはな、封印がまだ聞いているときに一気に倒さなきゃいけなかったんだ！！」

俺達の力が足りなかったのか？

「そうだ……。俺達だけで倒せるレベルじゃなかった……。レベルAだなんて……」

『輝弥！！僕チンももう長くは戦えないぞ！！』

「分かってる！！もう少し付き合えよ裕！！」

『承知した！！』

そう言って再び式神を召還する輝弥。しかしすぐさま爪で切り裂かれて消されていく。

「くつそー！！」

俺も靈氣をとませた刀を構えて特攻をかける。きしきしと刀が泣

いているのが感じられる。痛いだろう・・・ごめんな・・・。

「うおおおおお」

俺は思いっきり刀を振り下ろす。ガギンと硬い体に阻まれる。もう何度目だろう。美野里の弓矢も刺さらないくらい硬さ・・・。絶対防御・・・。清明はどうやって瀕死に近づけたんだ？？

『お兄ちゃん!!』

俺が愛華の言葉に気づいたときには俺はすでに宙に舞っていた。どうやら腸を切られたらしい。鮮血とともに木の葉のように舞、そして地面に叩きつけられた。

「佑介!!」

輝弥の声が遠く聞こえる・・・。ああ・・・輝弥も殴られたようだ・・・。俺達負けるのか・・・。

『お兄ちゃん・・・』

愛華・・・俺もそっちに行くのかもな・・・。

『汝・・・我とともに生きぬのか??』

ギン・・・俺だってまだ負けたくないさ・・・。でも・・・。

『汝・・・まだ我の力を行使してぬ』

あれを使えば刀が・・・。

『お兄ちゃんは怖いのか？刀がなくなることがそんなに怖い？？みんながいなくなるやり怖いことってあるのかな？？』

愛華・・・？？

『お兄ちゃんは刀をもつと信用しなよ。それはお兄ちゃんが思ってるよりも頑丈だよ』

信じる・・・？？

『汝・・・我の力を使え』

みんながいなくなれば戻ってこない・・・2度と・・・刀はどうだ？？そりゃ・・・こいつは俺にとつて最高の相棒だ。ただの武器じゃねえ。でもここにかばって戦えば確実に殺される・・・俺には選択肢はこれしかないのか？？

『あつはつはつは。これは久しぶりに面白い少年に会いましたね』

誰だあんたは・・・。

『あつはつはつは、これわこれわ遅くなりましたね。わたくし陰陽師安部清明と申します』

清明だと！！なんで？？あんたは死んでるはずじゃ・・・。

『これは私の記憶です。あなたは何でも記憶を見る力があるらしいですね。あなたの守護霊たちが教えてくれましたよ』

記憶か・・・こいつは確かにあんたが封印したんだよな。

『ええ・・・何人もの弟子を失いながらも何とか封印をすることができたという怪物です。今思うと弟子たちには本当に申し訳ないことをしたと思っています』

あいつの弱点とかはないのか??何でもいいんだ!!教えてくれ!!
『・・・』

なんで何も言わないんだ!!このままじゃみんな殺されちゃう!!
そんなのは嫌なんだ!!

『守りたいという強い心・・・それがあなたに更なる力を与えてくれるでしょう』

それだけか??というか弱点じゃないだろ!!

『私からはそれだけです。あなたならできるでしょう。また後で会うことができることを祈ってますよ』

おい待ってくれ!!おい!!清明!!俺は再び現実に戻された。目の前には鬼が立っていた。あたりには倒れた仲間たち。立っているのは俺だけらしい。

『お兄ちゃん・・・』

すまないな愛華。俺にはまだやれるらしい。

『当然だよ。なんだって私のお兄ちゃんなんだから』

あはは、ありがとう。それじゃあいつちよ派手にやりますかな!!

「ギン！！いくぞ！！」

俺は再び刀を片手に構える。放てるのはたった1回。それも渾身の力をこめたもの。

「人の闇より生まれ、人の心を食らうもの、陰と陽との調和のもとに、我が描きし5望星によりて無に返す、悪霊滅すべし！！」

唱えているときも銀の冷機をまとった刀がきしきしと鳴っていた。俺は刀で5望星を描く。そこには白銀に輝く星が出来上がった。そして上段に構えたまま、振り下ろした！！

「封星龍破！！」

ドクン！！

なんだか変な感覚を心臓付近に感じた。それでも放たれた俺の渾身の攻撃。具現化されたギンが鬼に向かって突進する。

『ぐおおおおお』

「ぎいいいあああ」

ギンの牙が鬼に突き刺さり、鬼の爪がギンの体を切り裂く。激しい守護霊と悪霊の戦いが繰り広げられる。

「こいつはおしつおされつだな」

ギンと鬼の体は傷だらけでぼろぼろだった。

『お兄ちゃん！！止めを刺すならいまだよ！！』

『汝・・・こいつを討伐せよ！！』

サンキューギン、愛華。俺は愛華とギンの靈気を二重にまとわせ、かつてない靈圧を伴った刀を持って神速の速さで鬼に近づく。

「ぐあああああ」

鬼のほうも近づいてきた俺に気がついてらしいが、ギンが体でブロックしているため身動きが取れない。俺は宙に舞いそして鬼に向かって渾身の抜刀を繰り出す。

「うおおおおおお」

みんなを守る力を！！愛する人を守る力を！！

「くられ！！滅悪龍炎！！」

俺の刀からは銀色の炎が噴き出し鬼を包み込むそして・・・。

「刀を突き立てれば・・・」

終わりだと俺は言おうとしていたのだが・・・。何者かに殴り飛ばされた。

「なんで・・・どうして・・・」

俺の目の前にいたのは・・・。

「なんでなんだよ・・・小西さん（・・・）」

俺のことを殴り飛ばしたのは小西さんだった。でもいつもとは違った。体の回りには黒いオーラをまとっている。そして俺の問いかけに反応し振り向いた・・・。

「佑ちゃん。ご苦労様」

小西さんではなかった・・・。額には血の様に真っ赤な石をはめ込み、耳まで裂けるように口をにやっとさせて笑って見せる。

「このこの力がどうしても欲しかったの。だからみんなが死に物狂いで封印までもって言うてくれるまで待ったたわけ。そしてこの子の力を私の体に取り入れる」

『汝・・・何者か??』

「なんだいまう忘れちゃったのかな??」

『何だと??』

「あんたのご主人様を殺したのは私だよ」

『貴様・・・』

何のことだかさっぱり分からなかった。俺は愛華を探すと愛華は倒れたフィオネのもとに行っていた。どうしたわけかフィオネの姿が透けていた。俺も急いでそこに向かう。

「どうしたんだフィオネ!!」

『私はあの人の心にすむ怪物に気づくことができなかった……。それだけが心残りです』

「何死に行くようなこと言っただよー!!」

『私の霊気はすべてあの怪物に食べられました……。もうここにとどまることはできません』

「お前はどこに行くんだ??」

『天国だよ……。お兄ちゃん』

「愛華……」

『私はもう1度転生します。転生したときに皆が幸せになっていることを祈ってます』

「おい!!死ぬな!!」

『お願いします……。あの人の心は闇に飲まれています。助けてください……。』

「分かった!!助けるからお前も生きろ!!」

『わたしはもう死んでいます……。ここから離れるだけ……。』

フィオネはゆつくりと消えていき。そして最後に。

『信じています』

そう言っで消えていった・・・。

「うおおおおおおお」

俺は小西さんに向かって刀を向けた。小西さんを助けるために！！
しかし・・・。

「うるさいゴミだ」

「なー！！」

ばきん！！と俺の刀が折られた。小西さんは真つ黒な刀で俺の『牙狼丸』の刃を斬った。渾身の靈気をこめていたにもかかわらず・・・。
。小西さんの刀にあるどす黒いオーラが上回ったらしい・・・。

「く・・・くそー！！」

俺は倒れた体を起こし再び走ろうとしたが。

「ゴミはゴミらしく地面に転がっている」

そう言っで空に刀を向けてから下に振り下ろした。

「黒雨封槍」

「ぐあああああ」

俺の四肢には黒い槍が突き刺さり身動きができないようにする。あまりの痛みに俺は悲鳴を上げてしまう。

「さあ、かわいい子。私と今1度ひとつに」

『貴様！！クロス！！』

「ギン！！」

ギンが小西さんに特攻を仕掛けた。しかし・・・。

「主人とともに戦わない貴様に恐怖心はない。今は消えていてもらおう」

刀を横一線に振るう・・・。

「黒半月斬！！」

どす黒い半円状の衝撃はがギンにぶつかった。ギンはそのまま真つ二つにされ消えてしまった。どうやら霊気をほとんど失ったからなようだ。そして小西さんは再び鬼と対面し。

「私と1つに」

俺は信じられないものを見た。鬼が小西さんの体の中に吸い込まれていつているのだ。あの巨大な鬼があつという間に吸収された。そのとき俺は場の雰囲気が一層に重くなったのを感じた。愛華も立ってられないようだ。負の霊気が場を支配しているらしい。

「私はこれから蒼陽市に戻って計画を実行するから」

さらりと自分たちの計画をばらす。

「そんなことをばらして何の意味がある！！お前らにとって不利に

なるだけだぞ!!」

「あはははは、佑ちゃん面白いこというね。でもゴミがいくら情報知っても何もできないでしょ??」

「ふざけるな!!お前は誰だ!!小西さんを返せ!!」

「あははははは、それはかなわないね。この世界を破滅の世界へと変える……。そして私はかつて藤原さくらに取り付いた悪霊……。神崎夢」

「神崎??」

俺が戸惑っているとゆつくとやつは消えていこうとした。

「待て!!小西さんを返せ!!」

俺がいくら叫んでもやつは笑いを辞めない。

「貴様もやつと同じ運命をたどる。愛する者も救えない……。そんな運命を繰り返すのだ!!はーはっはっはっは」

「ちくしょおおおお」

黒い空が快晴に変わると同時に俺は体を動かせるようになった。あたりは戦闘で悲惨な状態。そしていつの間にか夜になっていた。

「うーん」

どうやらほかの2人が目を覚ましたらしい。大丈夫か??

「うん。なんとか」

「ああ、ところでやつはどうした?? お前のつれもないし」

やつは小西さんに取り付いていた悪霊に取り込まれた・・・。

「!!」

2人は驚き、信じられないという顔を下ががかわらず俺は続ける。

「やつは今蒼陽市に向かっている。そこで世界を新たに創造しようとしているらしい・・・」

「そんなことができるのかな?」

「できるからやろうとしてるんだよ」

「ああ、でも一体どうやってやるのかは分からなかった」

「しかしそこまで分かれば悪霊たちとの最終決戦は近いんだな」

「そうだね。そのためにはもっと強くななくちゃ」

「俺はこれから『ガイア』にはいるんだよな。俺はまだ別の立場に立つけれども」

「心配するなひろひろ。俺達はそれでもともに戦った仲間だ。これからもな」

「ああ、口が悪いのは気に食わないがな」

「言ってるクソヤロウ」

『それよりお兄ちゃんの刀どうする?』

「」「あ……」

俺は重要なことを忘れていた。あの野郎に刀折られたんだ。どうしよう!!!!

『すいませんがお話よろしいでしょうか?』

俺達が振り向いたそこには。

「安部清明……」

につこりと笑う清明の姿があった。

ミッションIN修学旅行〜清明神社編〜（後書き）

コメント待ってます!!

ミッションIN修学旅行く神崎家の過去く

俺達は清明神社の中に案内された。いつもは中には入れないらしいが特別らしい。そして嘗て清明が使っていた部屋に案内された。そこには古びた巻物やら掛け軸やらがたくさんあった。

「すごいですね」

歴史が好きな美野里さんが興奮しながら見て回っている。

「確かに保存が利いているから、ちゃんと嘗てのままだ」

感心している輝弥。俺達は座って式神に出されたお茶をすすっていた。

「俺達に話したいことってなんですか??」

俺は清明に聞いてみる。

「あの少女とあなた方兄妹についてです」

「俺達との関係??」

『どういうことですか??』

「私が生きていた頃です……。私の友達に神崎清信かんざききよのぶというものがいました。彼はいつもとある姫に野本に通っては得意な笛を演奏していました。その姫こそが藤原さくら……」

「あの時出てきた名前だ・・・」

「聞き覚えがあるんですね。それはギンと契約したときですね」

「なんで分かるんですか?? あなた方は似ているからですよ。先祖とね」

「・・・」

「そして清信には妹がいました。神崎千晴・・・。容姿端麗、才色兼備。見事なまでの女性でした」

「俺と愛華みたいなものだな・・・」

「そして千晴殿は清信殿に恋をしていたのです」

『まんまだね』

「ああ・・・」

「しかし、清信殿はさくら姫にしか眼が行っていなかった。ギンに乗って空を飛んだりするのは日常茶飯事でした」

「俺と同じだな・・・」

『お兄ちゃん・・・まさか・・・』

ちよつと待て愛華!!ここは話を聞こうではないか!!

「千晴殿の心にはさくら姫に対する恨みが募って行きました。大切

な兄を奪われてしまうと……。そして決定打になったのが彼らの結婚でした。藤原家は最初は渋っていました。が、数々の戦いで多くの活躍を治めた清信殿に押し切られた形で結婚を認めたのです。まあ、最後は太鼓判を押されたのですがね……」

「それで……?？」

「結婚式の当日……事件は起きたのです……」

「……」

『何が起きたんですか??』

「千晴殿がさくら姫の魂を悪霊たちに売ったのです……」

「なんだって!!」

「マジかよ……」

「そんなことができたんですか??」

「千晴殿は昔から祈祷術が得意でしたから……術式を組み立てさくら姫に襲わせるようにしたのです。そして会場はひどい状態になりました。最悪のことにさくら姫に取り付いたのが悪霊に心を食われた千晴殿でした……」

「なんてことだ……」

「あまりに強い悪霊を呼び寄せてしまい、自らでは制御できなかったのでしょうか……。封印を余儀なくされた清信殿はその日から

3日3晩戦い続けました」

「人間業じゃねえな・・・」

「清信殿はたださくら姫と千晴殿を助けたい一身で銀とともに戦いました。あふれる悪霊たちをギンが喰らい、清信殿が悪霊化した彼女と戦いました・・・。そしてギンが力尽きながらもすべての悪霊を喰らい・・・清信殿は自らの魂を刀に転生し彼女たちを救いました。そのときの悪霊が2度と出ないように『壊魂石』という赤い石に封印して・・・」

「その後はどうなったんですか??」

「さくら姫と千晴殿は助かりました。しかし清信殿は魂を消費すぎ結婚した後数ヶ月でなくなりました。その後ちゃんと子供は生まれたそうです。その子が生まれなかったら君たちは生まれなかったんだよ」

「そうですか・・・」

『ですね・・・』

「これが私が知っている神崎家の過去だ」

俺は何も言えなかった。あれは俺のご先祖様が命をかけて封印した悪霊だったなんて・・・。

「ところでこいつの刀どうにかならねえかな??」

「あ!!!忘れてた!!!」

俺は急いで折れた刀を鞘から出した。

「これは派手にやられましたね。それにすでに寿命来てますね」

「ギンの力を使ったときにヒビ入ったんです」

「もともとこの刀ではギンの力は耐えられないんだよ。もともとギンを使いこなす刀はこの世に1本しかないからね」

「あるんですか??」

俺は身をのりだして言う。

「君ガギンに認められた人間だからね。きっとこれを使いこなせるだろう。君のご先祖様の魂が脈々と受け継がれているこの刀・・・名を『桜一文字』。僕にも抜けなかったこの刀。君なら抜けるだろう」

俺は清明から受け取った。この刀はなぜか俺の右手にしっくり来る。まるで俺の手と一体化している感じた。

『お兄ちゃん・・・抜いてみれば??』

そうだな・・・。俺は立ち上がり、鞘と柄に手をかける。そして・・・。

「抜けた・・・」

なぜ抜けないのかと質問したくなるように滑らかに鞘から刃が出てきた。銀色に輝くその刀には飾りとして柄に桜という文字と花びらが彫られていた。

「さすがだ・・・今日まで待ち続けてきた甲斐があったよ」

清明も嬉しそうだ。俺は少し力を入れてみると、刀の刃にギンの力が付加された。銀色の靈気をまとっていた。

『きれいだねお兄ちゃん!!』

ああ、そうだな。

「これで清信殿との約束を果たせたよ」

「約束??」

「氏の魔ぎはに俺の子孫にこの刀がふさわしいものが現れたら渡してくれとな。そのときあいつが現れるといていた。あの方は今回のことを予言していたんだ」

「今度は俺がやる番なんだ・・・でも先祖のようににはならねえ」

『お兄ちゃん??』

「俺は死なない!!そしてみんなと幸せになるんだ!!」

「そのためなら俺達も協力させてもらうぜ」

ありがとう輝弥。

「私も頑張るよ!!」

ありがとう美野里さん。

「私は少し眠りますかな。またあなたたちと会えることを楽しみにしていますよ」

「色々ありがとうございました」

「健闘を祈る」

そう言つて清明は消えていった。

「よし行くか・・・」

「ああ・・・」

「そうだね・・・」

「最後の決戦の土地・・・蒼陽市に!!」

俺達はその後宿舎に帰り次の日も残りの修学旅行を楽しんだ。小西さんの存在はみんなから消えていた。そしてもう1人も・・・。それに気がつくのはもっと後になってからだった。

ミッションIN修学旅行〜神崎家の過去〜（後書き）

コメント待ってます!!!

悪霊討伐部隊『ガイア』へ（前書き）

いよいよ新展開突入！！

悪霊討伐部隊『ガイア』へ

俺達は修学旅行から帰るとすぐに生徒会長に呼ばれた。教室に行くところにはスーツ姿の男性と俺と尾ないぞ死くらの女の子がいた。黒髪で肩まで切りそろえられている、10人中9人が振り向くかわいさがあった。残りの1人はゲイだからな……。そんなこんなで俺は説明を受けた。

「あなたが龍の力を持つ神崎佑介さんですね??」

はい、そうです。

「わたくし政府直属組織『ガイア』のリーダーをしています、赤坂悠二と申します。以後よろしく」

よろしく願います。

『私は愛華といます。お兄ちゃんの守護霊です』

「かわいらしい妹さんですね。かわいそうに、輝かしい未来があっただろうに・・・」

ほかの人にそんな道を歩いてほしくないから俺達は今戦ってるんですよね??

「そのとおりです。分かってくれていて嬉しいです。あなたたちには京都奈良での討伐に感謝しなければいけませんね」

それでも封印に失敗したのは俺です。しかも最悪な敵絵および寄せ

てしまった・・・。

「それは遅かれ早かれ起こることでしたから仕方ありません。今後はその被害を最小限に食い止めることが大切なのです」

そのために俺を組織に入れるんですか？？

「聖獣の力が必要不可欠だからです。あの悪霊を倒せるのはあなたを含め4人だけです」

そんなに強いんだな・・・あの悪霊。畜生・・・小西さんに乗っ取りやがって！！俺はバンと机を叩く。

「落ち着いて佑介くん。まだ桜が死んだわけじゃない・・・」

そうですね・・・すみません会長。

「詳しいお話は皆が集まる社の方でいたします。車を用意してますので乗ってください」

分かりました、行くぞ愛華。

『ラジャー！！』

「佑介くん・・・私がついていてあげられるのもここまで。後はあなたたちの力で頑張りなさい。私たちも誠意パイ援護するから」

ここまでやっていただいただけでも感謝し切れません。またみんなで生徒会の仕事・・・もちろん学校のほうですけれどもやりましようね。

「そうね。できるように頑張らしよう」

『少年よ、お主には力がある。あとはそれを引き出しきれるかは何のために戦っているかじゃ。わしからのアドバイスはこれぐらいしかできん』

これだけでも十分答えだよ。ありがとうハク……。それでは行つてきます。そうして俺達は車で社まで移動した。

「こちらです」

ガチャリと開けられたドアの向こうには大勢の人々がいた。ざっと見て10人くらいか？狭いから多くいると勘違いしたのか。それにしても俺みたいな高校生は4人しかいないな。後は皆大人だ。

「こちらが龍の力を持つ神崎佑介君です」

神崎佑介です。皆さんの力になれるように頑張りますのでよろしくお願いします。俺が挨拶するとほかの人もよろしくと返してくれたのでファーストコンタクトは成功だった。すると3人の少年少女が俺の前に現れた。

「俺の名は魅車圭吾だ。俺の相棒はこのスナイパー・バルドだ。俺の目になってくれている。お前と同じ力……。朱雀の力を持っている。これからよろしく」

『。。。ヨロシク』

よろしくな、圭吾にバルド。

『私は妹の愛華。お兄ちゃんの守護者だよ』

「愛華ちゃんか、よろしくね」

圭吾は愛華と仲良くなれたようだ。

「私は須藤紗江子。この子は私の右腕となってくれている佐代子。私のお姉ちゃん。私は白虎の力を持っています。これからよろしくね」

よろしく。

『よろしくね』

『妹がお世話になります。よろしくしてやってください』

「お姉ちゃん、そこまで私って頼りないのかな?？」

『あなたはすぐに突っ込む癖がありますからね。それが心配で心配で』

あはは、そんなときは俺達がカバーしますよ。なあ、圭吾。

「ああ、そうだな。俺達に任せてくださいよ」

「僕のこと忘れてないかな君たち・・・」

やっべ・・・忘れてた。悪い。

「別にいいさ。僕は浜島拓斗。めんどうなことは嫌いだね、玄武の力でいつも処理している」

お前の守護霊は??

「こいつのこと??」

指を指されたほうには小さな女の子がいた。5・6歳だろうか??

「こいつは僕の妹でね。脳をめちゃくちゃにされたときにこいつも殺されたんだ。君たちとはまた違った悪霊にやられたんだ」

そんな奴もいるのか??

「いろんな悪霊がいるさ。残りのスポットも後1つ。最近強力な悪霊が住み着いたらしいからね。油断できないんだよ」

そうなんだ……。というわけでよろしく。

『よろしくね』

この子の名前はなんていうんだ??

「浜島千沙……」

千沙ちゃんよろしくね。

『よろしくね』

『……よろしく願います』

「自己紹介も終わったところ早速だが……討伐に行く」

来たか……。最後のスポット……。

『お兄ちゃん頑張ろうね……。』

オッケー。新しい刀の力……。見せてくれよ『桜一文字』！！

「目的地は蒼陽中央公園だ！！」

『ラジャー！！』

蒼陽中央公園？？なんか聞いたことがある名前だな……。なんだか懐かしい感じもする。そんなことを考えながら俺は専用の大型車に乗り込み向かった。そこで悲しい戦いが始まることを知らずに……。

悪霊討伐部隊『ガイア』へ（後書き）

コメント待ってます!!

ミッション〜恋した悪霊を救え〜玄武の力（前書き）

いよいよ最後の戦いが近づいている。

ミッション〜恋した悪霊を救え〜玄武の力

俺達を乗せた大型車は公園に向かって走っていた。リーダーが悪霊についての説明をしてくれていた。

「まず対象の悪霊は最近ここに来たらしいね」

最近死んだ日とか、それとも悪霊に魂を食われたってことですよね。

「ああ、それに悪霊とは死ぬまぎはに抱えている思いによってレベルが変わるんだ」

圭吾が教えてくれた。なるほど、人生に疲れた人はレベルが低いのかな。

「そうなるね、最も思いに関係するのは恋愛関係だっていう結果が出ている」

拓斗がパソコンの結果を俺に見せながら言う。確かにそうだった。

「恋愛にはいろんな感情があるからね。白いものもあれば黒いものも・・・」

紗江子が言う。表情が優れないことからこいつは恋愛経験者かな？？

「私じゃないの。お姉ちゃんがね、こうなったのは振った彼氏が恨みから悪霊化したことが原因なの」

なんて勝手なやつなんだ。俺はそれによって悲しい思いをした悪霊

をもつ見ているからそれに関しては頭にきていた。

「説明を続けるけれど、性別は女。まだ若く、高校生ぐらいじゃないかな?? 詳しい目撃がないからあいまいだけれど。間違いなくレベルはAだ。皆心してかかってくれよ」

『了解!!』

そして公園に近づくにつれて空気が重くなってきた。相当負の力が強いらしい。

ききいい!!

車が止められ俺達は配置に付く。ゆつくりと公園内に侵入する。人は誰も着ていない。危険警報を発令していたのだった。

「おっし、俺が先頭で行く」

がっちりとした筋肉男が言う。メリケンサックに力をこめて進んでいく。どうやらあれに霊気をこめているらしい。

どどどどおおおん!!

いきなり爆発が目の前で起こった。爆風で俺達は後方に吹き飛ばされ、何とか着地に成功する。目の前には……。

「小西……さん……」

和服姿で変わり果てた姿で立っている小西桜が立っていた。手には漆黒の日本刀。彼女の足元には魂を喰らいまくってからだから魂の

形として人間の形がくつきりと体中から見えるあの時封印し損ねた鬼がいた。更に子に資産の隣には彼女と同じ石を額に埋め込まれた少女が立っていた。彼女にも見覚えがある。そして思い出がよみがえってきた……。

『まってよ……!!』

『あはは、佑ちゃん早く!!』

俺とその女の子がここではしゃいでいる。両親がまだいた頃の記憶。親同士仲が良かったので俺達も自然と仲が良くなった。

『今度は何して遊ぼうか』

『うーん、おままごとは?』

俺が何やるか聞いて、その子はおままごとと言った。その後変えるまで延々とおままごとをやっていた気がする。そして最後に彼女は行った。

『じつこじゃなくて本当にこんな生活できたらいいね』

『僕なんかでいいの?』

『佑ちゃんだからだよ? 佑ちゃん優しいから』

俺はその時顔を真っ赤にしたように思える。

『僕も将来結婚したい』

『それじゃあ約束ね』

女の子がにつこりと笑いながら小指を差し出してきた。俺もそうした。

『約束だね菜月^{なづき}』

思い出した！！あそこにいるのは俺の幼馴染だ！！

「なんでお前がそこにいるんだ！！」

俺の顔色は最高に悪かったに違いない。だってそこにいるのはまったく関係のない高校生なんだぞ。

「あれ？？佑ちゃん？？」

小西さん・・・じゃない・・・神崎千晴が言う。

「なんでそこに菜月がいるんだ！！答えろおおおお！！」

俺はその場で絶叫した。

「あつははあああつああははは！！それはだね佑ちゃん。飛行機の中で運悪く菜月が魂食われたらしいよ」

そんな・・・あのときに・・・？？

「それにあの時近くにいたのは私。すでにあのときから入れ代わりが進んでいたのだよ。あなたを落とすには知り合いがいいと思ってね。この子の君に寄せる気持ちの強さには驚いたさ」

お前・・・そんなことのために俺の幼馴染を危険な目にあわせたのか??

「なんだかんだいって佑ちゃんが一番危険だからね。肉体的よりも精神的な部分から崩すのが手っ取り早いと思ってね。」

そんなことのために菜月を利用したのか!!ふざけるな!!俺はすでに切れていた。しかしかけださなかつてのは家尾後が俺の腕をつかんで首を横に振っていたからだ。

「ここであつに出るのは危険だ。怒るのはわかる。俺だってそんなことされたらお前と同じになるだろう。だがジジは冷静になるべきだ」

すまない圭吾。助かった。

「そんなにかしこまるなよ。俺達は仲間だし、友達だ」

そう言つて圭吾は笑う。俺も笑い返す。少し余裕ができたようだ。

「悪霊王よ、貴様はここで何をする気なのだ??」

筋肉男が言う。彼は熊山と呼ばれているらしい。

「貴様らが私の用意した子供たちを殺したのは」

悪霊王の顔が怒りに支配される。

「これがわれわれの仕事だからだ。貴様ら悪には負けない」

「ぎははっはは、これは愉快だ！どこまで私に反抗できるか見届けてやる！！」

そう言つて悪霊王は手を前に出し。

「相手をしておやり！！菜月！！」

ふらふらと前に出るのは感情が欠落した夏樹だった。同じく和服姿に変わっている彼女だがいったい何の関係があるのだろうか？？すると彼女の手にはどす黒い短剣が握られていた。空中に無数に浮遊しているのだ。こんなものか？？

「レベルAだよ」

拓斗が言う。あれだけ思いオーラ出してんだからそれくらいは強いだろうな。

「いけるの？？幼馴染なんですよ？？」

紗江子が俺のことを心配してくれたのか話しかけて来てくれた。ああ、確かに躊躇しそうになるが、それじゃああいつを救えないからな・・・。ここは心を鬼にしてぶった切るしかない。

「全員戦闘準備！！」

「準備！！」

若く色黒の双子の執事服の男が行った。兄の祐一と弟の祐二だったかな？？

「突撃いいいい！！」

リーダーの声に俺達は駆け出した。

「闇へと誘え・・・闇雨！！」

無数の短剣が空中から降ってきた。そこに。

「ここは僕の出番かな」

眼鏡を上げながら前に出たのは拓斗だった。手を上に突き出し言う。

「我と契約し玄武の力・・・われとわれの守りたいと思う人々を守りたまえ・・・。出でよ絶対の守護聖獣玄武！！名はボルグ！！」

ずっしいいいいいん！！

大きな何かが現れる音がした。てっきり短剣の雨が刺さったのかと思ったが、目の前には・・・。

「でえ・・・」

巨大な亀の怪物がいたのだ。否よく資料とかで出てくる玄武の姿だった。その玄武が短剣をすべて防いだのだった。そのおかげで俺達は全員無事だった。

「防御と後方支援は僕に任せてください」

淡々と言う拓斗だがこれほどの防御力があるとは感心してしまう。

「よし行くぞ！！」

俺は駆け出した。

ミッション〜恋した悪霊を救え〜玄武の力（後書き）

コメント待ってます!!

ミッション〜恋した悪霊を救え〜朱雀の炎と白虎の光（前書き）

いよいよクライマックス。

ミッション〜恋した悪霊を救え〜朱雀の炎と白虎の光

後方から拓斗の援護で俺達は確実に前進していた。しかし菜月は短剣を構えて切りかかってくる。あの明るいあいつからは考えられないくらい表情。鉤爪で火花を散らせる紗江子。無数に浮遊する短剣が俺達に向かってくる。

「回避!!」

一斉に俺達は地面にダイブする。先ほどまで俺達がいたところには無数の短剣が刺さっていた。それもすぐに消えてしまう。しかしそれくらいでは攻撃は止まらない。再び短剣の雨。しかも今度は範囲が広がった。

「これは回避しきれないぞ・・・」

『お兄ちゃん!!今こそ刀を使うときだよ!!』

愛華・・・そうだな。みんなを守るため、愛する人を守るため・・・俺はこの刀を引く。

まばゆい刀が姿を現す。両手でそれを構える。右手からギンの霊気が伝わり刀に付加される。それと同時に短剣が振ってくる。

「どうすれば・・・」

仲間の1人がつぶやく。こんなときはこうするんだ!!俺が前に出ようとしたら圭吾が俺を制して前に出る。

「ここは俺に任せてくれ。眠れるお姫様を起こすのは幼馴染だろ？」

そんな恥ずかしいこというなよな。ほら見る愛華が膨れちまったじゃないか。なんだよそんなに笑うなよな！！

「俺の力を見せてやるよ……。我と契約し朱雀。闇を打ち抜く力をわれに与えたまえ。出でよ！！神鳥朱雀！！名をユベル！！」

巨大な朱雀が姿を現した。離れていても熱を感じるほど熱かった。そして圭吾が愛用している拳銃とその朱雀・守護霊のバルドが同化した。現れた新たな武器とは。

「聖矢を放つアーチエリー……」

圭吾の右手には大きなアーチエリーがあつた。そしてその矢となるものはなんと紅蓮に燃える朱雀の羽だった。

「闇を打ち砕け！！聖炎散矢！！」

無数の短剣と同じく無数の羽がぶつかり合い消滅する。そして更に菜月に向かって標準を構え。

「そろそろ起きろよな。封闇炎矢！！」

ためられた羽が1つとなり、長い1本の矢となり、放たれる。渾身の1矢だった。

『！！』

皆が驚愕した。確かに矢が彼女を貫いた。しかし無表情のままその

矢を引き抜いて捨てたのだ。

そんなバカな……。圭吾の渾身の1撃だぞ……。菜月にまったく効かないなんて……。

「それなら私が行きます!!」

紗江子が叫び、聖獣を召還するべく詠唱を始める。

「我と契約し白虎。光を照らすべくわれに力を与えたまえ。出でよ!! 閃光白虎!! 名をシーフ!!」

光り輝く毛並みの白虎が表れた。背中には光の粒子が漂っていた。

「行くぞシーフ!! 闇を光で浄化する!!」

咆哮して、背中に紗江子に乗せて駆け出す。俺も来るべき時に向けて靈氣を一転に集中させる。頼むぞ紗江子。

そんな中で短剣の雨が降る。しかしそれを圭吾が次々に打ち落とし、道を作る。流れた剣を拓斗が防御で防ぐ。完璧な役割分担が成されていた。

そしてほかの仲間たちは後からあとから湧いてくる悪霊たちを片っ端からぶっ倒している。少数で多数の悪霊たちを圧倒する力を持つ仲間。本当に心強い。

『お兄ちゃん、みんな頑張ってるね』

ああ、そうだな。だから俺もへまできないんだよね。これ結構ブ

レッシャーなんだけど。

『まったくいつものお兄ちゃんはどこに行ったの?? 菜月さんを助けたいんでしょ今は??』

ああ、そうだよ。俺がすっかりしなきゃいけないんだ。俺には仲間がついている。愛華がついている。そして俺の手には相棒が握られている。負ける要素なんてどこにもないんだ。

そんな時ついに紗江子が菜月の元に到着した。

「浄化されなさい!! 光爪斬闇!!」

光に包まれた紗江子の鍵爪。あれはシーフから出ていた粒子のようだった。爪から出た残撃が菜月を切り裂く。それでも無表情の菜月。しかし封印攻撃を立て続けに食らったためか相当力を失っているようだった。

「行くんだ佑介!!」

リーダーの声に俺は駆け出した。腰には刀『桜・一文字』があった。準備は万端。後はこいつを菜月に放てばいい。

「はああああああ!!」

俺は跳躍した。そして鞘から出した刀を上段に構えて叫ぶ。

「銀龍の咆哮!!」

刀からは銀色の靈氣がまるで龍の方向のように吐き出され、菜月に

ぶつかった。見る見るどす黒いオーラが浄化されているのが分かった。そして最後に真っ白な閃光が広がった。

そして気がついたときには俺は夏樹のひざの上で横になっていた。周りには良かったと安堵する『ガイア』の面々となぜだかご機嫌斜めの愛華がいた。

「佑ちゃんごめんね……。こんなことになるとは思わなかったんだ……。」「

菜月は泣いていた。何もお前が悪いわけじゃないだろ?? 気にするなよな。

「それでも私はみんなにひどいことした……。私じゃない私の目から見てたけど、何度やめてといっても何もできなかった……。」「もはや泣いているに等しかった。どんな言葉も聞き入れないだろう。それほど菜月は傷ついていた。だから俺は行動をとった。その前に『ガイア』の面々にアイコンタクトをとると理解したのかその場から離れてくれた。愛華は離れたくないと言い張っていたが紗江子に引っ張られていった。

「佑ちゃん……。ごめんなさい……。うう……。」「

大粒の涙が彼女の頬を伝っていた。菜月をこんなにも傷つけたのは悪霊王のせいだ。しかし俺は悪霊王のことよりもまずはやらなければ行けないことがあった。決心した俺は菜月を優しく抱きしめた。

「ふえ???」「

間抜けな声を出す菜月。恥ずかしいのかばたばた暴れたが、頭を優

しく撫でると暴れなくなった。

「気にしなくてもいい。みんなお前を助けたかったんだから。助かったんだからそれでいいんだよ。誰もかけてないんだから」

「うわああーん！！ゆうちゃーん！！」

俺はただただ菜月を抱きしめていた。そんな一時の平和なときを感じていたと思っていた。しかし裏ではすでに終幕が迫っていた。

守護霊たちが消えるとき

俺達は翌日再び大型車に乗って最後の戦いの部隊に移動していた。ついたところは普通の野原。しかし空は黒い雲に覆われていて今にも闇の世界が光臨しようとしているかのようだった。

『お兄ちゃん、ここまで来れば後は勝つだけだよ』

ぐつと親指を立てる愛華。そうだな、最後は小西さんを助けるだけだからな。

「みな、覚悟は決まったな??ここからは聖獣の力を持つ4人が悪霊王を、ほかのものは悪霊たちを討伐して欲しい。ここまでくれば守護霊たちも力を思う存分震えるだろう」

その言葉に愛華をはじめとする守護霊たちが歓声を上げた。そしてやつが現れた。

「ははは、まったくわざわざやられに来たのか??人間どもが」

小西さんの声で話すのやめろよな。虫唾が走る。お前なんか小西さんを渡すわけには行かない。いい加減返してもらっぞ!!

「そのとおりだぜ佑介。さっさとこいつを討伐して祝賀会を開こうじゃないか」

ああ、それはいいな。飲めや食えやのどんちゃん騒ぎだ!!

「まったくあなたたちには緊張感はないんですか??」

眼鏡をあげながら言う拓斗。そういうお前だって興味心身じゃねえか。

「ぼくはそんなこと思ってないさ」

お??? ツンデレか??? やるね。

「ちょっとちょっとみんな、それは勝ってから考えればいいことですよ??? みんな戦闘開始してるよ」

俺は振り向くと向こうでは群れで迫ってくる悪霊たちを力ずくで倒している人々が映った。みんな俺達を信じているんだな。だったら俺達がやることは1つだ!!

「「「「お前を討伐する!!」「」「」」

「あーはっはっは、やれるもんならやってみな!!」

そついうと悪霊王は手をかざして詠唱する。

「今宵我はこの世の王となる。我にひれ伏せ霊たちよ。我の血となり肉となれ!!」

俺は次の瞬間愕然としたね。次々と飛び出してきた闇に愛華がつかまったんだ。愛華だけじゃない、ほかのやつ守護霊たちがみんな捕まっていた。必死にはがしにかかるもみんな苦戦していた。

『お兄ちゃん!!』

「愛華!!」

俺は必死に手を伸ばすも届かなかった。お兄ちゃんと何度も助けを求める愛華。俺は跳躍する。

「うおおおおお!!」

俺は愛華をつかむ闇を切り裂いた……。しかし切れなかった……。跳ね返されたのだ。

「なんで……??」

「ふはははは、貴様も分かつ、我と貴様では霊圧の強さが違うのだ!!そんな軟弱な霊圧で我を倒そうなどは滑稽だ」

笑い飛ばす悪霊王を無視して更に跳躍する。愛華をつかむ闇を斬るために!!

「はあああああ!!」

俺はかつてないほどの霊気を刀に付加させた。ただ愛華を助けたいと思ったから。俺の右腕からは鮮血がほとぶした。

『お兄ちゃん!!』

自由な片手を命いっぱい伸ばしてくる。俺は闇を斬りつけながら愛華に手を伸ばす。今度こそ届こうと思った。

ぶしゅうううう!!

『あああああつああああ！！』

鮮血ではないきらめくものが愛華の失われた腕から出ていた。悲鳴を上げながら愛華は闇に飲まれていった。俺は呆然と見ながら地面に叩きつけられた。あまりのことに着地を忘れていたのだ。それにまったく闇を切れなかった……。俺にはある文字が浮かんた……。

「終わりだ……」

ぼそりとつぶやいた。とたんに俺の体は動かなくなった。体が思い……。それに……。眠い……。みんなが何か叫んでいるのは聞こえるが……。もういいんだ。俺はそうつと目を閉じた。そしてこのとき、世界中から守護霊が消滅した。人々は生きる意志を失い、悪霊の道へと足を踏み入れる……。

守護霊たちが消えるとき（後書き）

コメント待ってます!!

目覚める龍の力く放て！！魂の咆哮く

俺神崎佑介はふわふわとした無重力間を感じていた。どうやら俺は死んだようだ。

俺は真つ白な空間をただただ歩いていた。そうすると映像が見えた。

「みんな・・・」

それは悪霊王に守護霊を奪われながらも聖獣を操り戦闘を繰り返す仲間たちがいた。

吹き飛ばされる青年がいた・・・。

「圭吾・・・」

血を吐き出す少年がいた・・・。

「拓斗・・・」

血でにじむ傷口を押さえている少女がいた・・・。

「紗江子・・・」

みんな戦っている。向こう側では人間と悪霊が戦っている。

「生徒会長・・・花田さん・・・それに松本さんまで」

かつての生徒会討手メンバーが来ていた。しかし守護霊を奪われ、

押されている感は否めない。

「輝弥・・・美野里・・・」

かつて旅行先で共闘した仲間も来ていた。

「みんな戦っているのに俺だけ勝手にあきらめた?？」

俺は強く手を握った。

「痛いな・・・」

爪で傷ができたのか血が出ていた。

「こんなものでまだ俺は生きているってことになるのかな?？」

「君はまだやることがあるのでは?？」

誰だ??

『君の先祖とでも言おうか。桜・一文字に宿った私の記憶の世界に君は来ている』

なぜ??俺はあの時確かに死んだはずだが・・・。

『君は確かにあきらめた。そして魂を閉ざした』

魂を・・・閉ざした??

『昔の私と同じだ・・・。やはり君は私と同じ道を歩むのだな』

血がっつながってるから??

『それもあるだろうし、君と私は似ているからな』

そうか?? あんたのほうが俺より強いと思うが・・・。

『人の強さとは一定ではないのだよ』

一定ではない??

『人は誰かを守りたいと本気で思ったときに強くなれる』

でもあの時は闇を切れなかったぞ??

『それは・・・』

おい!! どこへ行くんだ!! まだ話の途中じゃねえか!!

『あなたの本当に守りたいのは誰ですか?? 神崎佑介我が子孫よ』

そう言つて再び白い光が放たれた。俺はそこで目を覚ました。

「これは・・・」

俺が目覚めてから最初に見たのは悪霊たちに追い詰められた仲間たちだった。すでに倒れている仲間もいる。そんな状態で俺がやるべきことはたった一つだった。

「我と契約し青龍よ、我が友を守る力を、我が愛するものを守る力

をわれに与えたまえ！！出でよ！！白銀の龍！！名をギン！！」

詠唱と同時にギンが現れた。

『我が主よ、ついにともに戦うときが来た』

「もはや予断は許されない！！まずはみんなを助ける！！」

『良かるう！！主に我の力を預けた！！』

「うおおおおおお！！」

刀とギンが同化した。柄の周りには龍の姿が刻まれていた。桜舞う空に龍が泳いでいるかのように。

「はあああああ！！」

俺は渾身の力を込める。霊気が付加される。

「悪を討伐せよ！！龍の舞！！」

とたんに体が軽くなったね。俺は走って悪霊の群れに突っ込んで片端から切りまくった。次々に衝天していく悪霊。気を失ったままになる人間。どうやら仲間たちはうまく脱出したらしい。

俺はすぐにあいつの元に走った。すでにやつは何かの儀式を始めていた。

「いい加減にしろ……。お前の野望はここで費えるんだ」

「ひやははは、それはないと言っておこう。我はすでに莫大な霊気

を内蔵している。貴様なんぞが勝てるわけがない」

そのとき大きな地震が起きた。地面が割れそこからは巨大な鬼が現れた。あの時奪われたときのよりもまた巨大化していた。どうやら悪霊王が奪った霊気はすべて鬼に食わしたみたいだな。

「そんなに育ててどうするつもりだ?？」

「この子を使って世界の人々を恐怖のどん底に貶める。そしてあきらめたものから魂を提供してもらうのさ」

「まったくでかいこと考えたもんだな」

「やることはやはりでかいことではないとな」

「しかしかつてもそんなことやろうとして止められたんだろ??」

「昔のことはまったく興味はないが。あやつのように貴様は強くないからな。それほど危険視してないのだよ。先ほどだって私の力にひれ伏したではないか」

「け!!あの時はあの時だよ。今は違う!!俺は全力でデメエを討伐し!!小西さんを助ける!!」

俺は刀を鞘から出した。そして吼える。

「とどろけ!!龍の咆哮!!」

ギンを召還した。そしてギンの口からは銀色の光が一線となって鬼に直撃した。

「おおおおおお！！！」

鬼の体を次々に浄化していく。

「どうなっているのだ！！なぜこの子が消えるのだ！！！」

あわてているのは悪霊王。かつて鬼を討伐できずに封印にとどまつたのはこれがなかったかららしい。そんなことおさつき聞いた。

「これで終わりだ悪霊王！！！」

そして俺はかつてない封印攻撃を放つ。

「銀龍封悪斬！！！」

俺は軽く空間を飛んだ感じがした。気づいたときにはすでに鬼と悪霊王の反対側にいたのだから。鬼の腹には五望星が刻まれ底から光が漏れたかと思ったら真っ白な粒子と化した。

そして俺は悪霊王と対峙することとなった。

目覚める龍の力々放て!!魂の咆哮々(後書き)

コメント待ってます!!

対峙く巡る輪廻く

「はあああああ!!」

「おのれええええ!!」

俺と悪霊王の刀がぶつかり合い、火花が散る。相変わらずの速さと強さを突きつけて来る悪霊王。しかし、徐々にギンの力を解放する俺も何とかついていく。

「この人間ふぜえがあああ!!」

切れる悪霊王。刀からはどす黒いオーラが放たれる。俺はそれを正の霊気で切り裂く。しかし相手はこんなことでは潰れない。次々と闇の中から悪霊たちを呼び寄せる。このままじゃ、邪魔になって切り込めない。

『我が主、我を使え!!』

ギン・・・よし行くぞ!!

「くらい尽くせ!!聖獣召還!!」

ギンが刀から召還され、悪霊たちを食らっていく。道ができた!!

「食らえ!!」

正の霊圧を斬撃波として飛ばす。それをオーラで防ぐ悪霊王。まったく隙がない。

「ほれほれ、どうした??先ほどの威勢はどこに行ったのだ??」

俺を挑発しようってか??

「今からやってやるよ!!」

再びギンと同化させた刀を叩きつける。ガギン!!と大きな音が響く。

お互いが勢いで後方へ飛ぶ。あたりの木々はなぎ倒され、草は枯れ果て、土はえぐられ、まともな足場がほとんどなかった。

「そろそろこゝろあいといったところか・・・」

にやりと笑う悪霊王。一体何をたくらんでやる。

「この世を統治するものとなる我に従う僕よ!!今ここに現れん!!」

突如として黒い空に渦が起った。なんだか嫌な感じがする。

「!!」

俺が見たものは・・・真っ黒い龍だった。

「我が僕黒龍……。かつての戦いはここで終わったのだ。しかし貴様には力はない。ここで輪廻を終わらせる!!」

黒龍が口を開く。俺も負けじと刀に靈気を集める。

「黒咆哮!!」

龍の口から負の靈氣が吐き出された。そして俺も一気に刀を振るう。

「銀龍の咆哮!!」

ギンを召還し、その口から銀色の正の靈氣が吐き出されぶつかり合う。

力と力のぶつかり合い。そして黒と白の閃光がほとばしる。

「く・・・どうなったんだ??」

俺はしばらくしてから目を覚ました。そして見た光景は・・・。

「ギン・・・」

体の半分を持っていかれたギンの姿だった。もちろん黒龍も大きなダメージを追っていたがギンよりは軽かった。

『我が主・・・主だけではこいつには勝てん』

息もたえだえのギンが話す。お前はいったん刀にもどれ。回復させる。

『こいつはかつて戦ったときよりも力を増している。あの時だったら今ので倒すことはできただろう』

そして空を見上げて俺は絶句する。

「何だってこんなときに・・・」

無数の悪霊たちの集団が向かってきていた。

「はーはっはっは、この世は我のもの！！存分に喰らいつくせ！！
我に従うものたちよ！！」

悪霊王・・・貴様・・・。

『やるしかないぞ我が主・・・』

やるって何をだ???

『我ら四聖獣を使った最大封印攻撃・・・その名を四聖封陣・・・』

対峙く巡る輪廻く（後書き）

コメント待ってます!!

ファイナルミッション〜四聖封陣にて悪霊王を討伐せよ〜（前書き）

最後の戦い・・・。

ファイナルミッション〜四聖封陣にて悪霊王を討伐せよ〜

最大封印攻撃……。そして後ろからは最後の戦いに終止符を打つための役者たちがやってきた。

「佑介……。俺もユベルから聞いた……。やるんだろ??俺達の連携攻撃!!」

圭吾が走ってきた。体中が傷だらけだ。俺が寝ている間に戦っていたんだもんな。

「すまない……。俺が勝手にあきらめちまってたから」

バゴッ!!

俺は殴られた。

「いてえ……」

「痛いだろうな……」

俺は頬を押さえながら見上げた。そこには怒っているようでうれしそうな顔をした圭吾がいた。

「俺達はお前が寝ているときも戦っていた。俺達はあきらめなかった」

そうだな……。だからそんなにも傷だらけだもんな……。

「それに俺達はもう一度お前が立ち上がることを期待していた」

え???

「お前だったら・・・きっと立ち上がってくれるだろうって・・・生徒会長さんたちが言っていたんだ。それにキザな男やかわいい女の子もそんなことを言ってたぞ」

生徒会長・・・輝弥・・・美野里・・・。

「殴つたのは勝手にあきらめたからだ。謝らないからな」

ああ、別にいいさ。俺の責任だからな。

「まったくあなたには失望しましたよ・・・佑介さん」

拓斗・・・。

「しかしそう言いつつも戻ってくるとはまったくあなたは何者ですか??」

眼鏡をあげながら聞いてくる拓斗。俺はただの討手さ。

「それでは準備にかかりましょう。長引けば悪霊が増えてしまいますからね」

そうだな、始めるか。

「佑介くん・・・」

紗江子・・・。

「圭吾くんが殴ってくれたから私は殴らないけど言わせて・・・」

・・・

「バカ!」

そういわれて当然だな。ごめん。

「でも・・・お帰りなさい」

・・・ただいま。

俺は立ち上がると刀を出した。皆もそれぞれ武器を出していた。

「やり方はわかりますね??」

癖なのだろう、拓斗がまた眼鏡をあげながら聞く。

ああ、みんな聖獣から聞いているからな。圭吾や紗江子も同じだった。

「では、それぞれの持ち場に行ってください。チャンスは一度きり」

俺達が走り出そうとしたら。

「君たち・・・」

リーダーだった。

「悪霊たちはぼくたちでなんとでもなります。君たちの邪魔をさせ

ないよう食い止めますから君たちに世界を託します」

分かってますよ。そちらこそお願いします。

「佑介くん……」

生徒会長？？

「桜ちゃんをよろしくね」

分かってますよ……。またみんなで生徒会しましょう。

俺達は走った。世界を守るために。

悪霊王はすでに高みの見物状態だった。俺達はそれを確認しつつ東
西南北についた。

「一体人間どもはいまさらになって何をしよう？？くずが集まってもくずの塊にしかないというのに」

悪霊王は高笑い。しかし俺達は動じない。見てろ……。いまからお前がくず呼ばわりした人間があつと驚くことをしてやるぜ。

「「「出でよ！！青龍（朱雀・白虎・玄武）！！」「」「」

俺達の隣には聖獣が現れた。

いくぞギン……。最後の戦いだ。

『我は主とともに生きる……。』

行くぞみんな！！

「人の心の闇より生まれ」

圭吾が詠唱を始める。朱雀の姿が赤い球体になる。

「人の心を食らうもの」

拓斗が詠唱を始める。玄武の姿が緑の球体になる。

「陰と陽との調和に元」

紗江子が詠唱を始める。白虎の姿が白い球体になる。

「我らの手にて無に返す」

俺が詠唱を始める。ギン・・・青龍の姿が青い球体になる。

「これはなんだ？？」

悪霊王が焦っている。球体たちから出た糸状の閃光がそれぞれの球体を丸くつなぎ。円陣を描く。そして最後の詠唱を叫ぶ！！

「『悪霊！！滅すべし！！』」

円陣がいきなり上空へ一気に上がり、悪霊王をその中心に置く。

「何だこれは！！動けぬ！！」

刀を振るも浄化のスピードが速いため負の霊気は出てこない。

「チクシヨウ！！くずの集まりのくせに！！」

お前はそんなくずの集まりに負けるんだ！！4体の聖獣が悪霊王を貫く。4色の光が混ざり合い、闇を浄化していく。

「「「「四聖封陣！！」」」

「ごがあああああつあああ！！」

悪霊王の最後の悲鳴が響き渡る。闇が浄化される。それを覆っていた闇もまた晴れ渡る。そして小西さんの隣にはどす黒い球体が浮遊していた。

「あれが本体だ！！」

リーダーが叫ぶ。

「佑介行くだ！！」

圭吾が叫ぶ。

「行ってくださいよ」

拓斗がいう。

「お願いね」

紗江子が言う。

『行くか、我が主よ』

ああ、行こうぜギン……。あいつを討伐しに!!

「あのれゝ人間どもめ!!長年の願いはもうすぐそこだというのに!!」

「お前には何年かかって無理だろうぜ」

俺は駆け出す。

「こしゃくなゝ!!先祖同様に我の邪魔をしよって!!」

「そういうお前だつて先祖同様に思い人に手を出しやがつて!!」

「ならば貴様を殺して、この世界を我のものに!!」

「それはさせない!!」

俺は刀を腰の鞘に納めて跳躍した。皆の思いを力に変えて……。思い人を助けたいと思う気持ちを力に変えて……。

『あつはつは、いまこそ新の力を解放するときです』

清明……。来てたのか??

『私は幽霊ですよ??どこへでも行けますって』

ならば見ている!!俺が先祖と同じ運命を歩まないということをし!!

『拝見させていただきます』

「しねー!!」

悪霊王が突っ込んできた。そして俺は抜刀を開始する。あの時初めて刀を手にしたときから練習してきた抜刀だ。

「咲き乱れ、宙を舞え!!開桜・龍の舞!!」

どこからか桜が現れる……。俺はその中をただ神速で駆け抜ける。そして……。

「はあああああっああ!!」

抜刀!!

俺は悪霊王の後ろにいた。空からはなぜだか季節はずれの桜が降ってきた。

「……この世はままならぬな」

「あんたはもつとましな生き方をしな……。来世でな」

「ようやく昇天できそうだ……」

そして最後に聞いたのは。

「ありがとう」

まさかの悪霊王からの言葉だった。やつは笑顔を俺に見せながら消えていった。どうやら昇天したようだ。以降からはみんなが走って

きた。

「やったな佑介」

圭吾が開口一番。

ああ、まったくもって疲れたよ。

『おにいちゃん!!』

俺はいきなり現れた愛華に抱きつかれた。なんでお前がいるんだ？

『なんだか悪霊王がいなくなったらいつの間にかここにいたんだよ』

まったくもって意味が分からない。

「ほかの悪霊たちも悪霊王がいなくなったことで消滅しました。まあ、まだどこか出会うとは思いますがけどね」

拓斗……。ははは、いまはゆっくり休みたいよ。

「さすが佑介くん!!先祖同様にやってくれたね!!」

お前は元気そうだな紗江子。

『あつはつは、さすがの一言に尽きますよ佑介くん』

清明……。皆突然現れた清明にびっくりしていた。

『あなたは魂を消費することなく、霊気のみでやつを倒しました。』

それも皆の力を合わせたからでしょうね』

それは否定しない。みんながいてくれたから俺は最後に決められたんだ。だから俺が言うことは。

「みんなありがとう」

その日、世界に平和が戻った。

ファイナルミッション〜四聖封陣にて悪霊王を討伐せよ〜（後書き）

次回最終回！！

コメント待ってます！！

守るつこの世界を（前書き）

最終回。

今まで呼んでくれた皆さんに感謝します！！
どうもありがとうございます！！

守るつこの世界を

「今日の出動先はどこですか??神崎リーダー(……)」

「圭吾か。まだ成り立てだからリーダーって言われてもぴんと来ないな」

「あの人がなくなっってからもう5年が経つのか??」

「ああ、俺に色々と教えてくれたからな」

俺と圭吾はリーダー室を出た。

作戦会議室に行くところにはかつての……否今の仲間たちが待っていた。

「リーダー遅いよ」

すまないな紗江子、ちょっと感慨にふけていたんだ。

「まったく俺らのリーダーはのんびり屋だな」

輝弥……相変わらずだな。

「そんなことよりも今日のポイントはどこなんですか??」

美野里……そうだな。

「今日は北に3キロ行ったところの廃ビル。そこに面白半分で行っ

た高校生がまだ戻ってないみたい」

「そそ祖それならはやくいつてあげなきゃいけませんよ」

ありがとうございます生徒会長・・・じゃなくて深夏さん。慌てすぎですよ花田さん。

「閉められてから相当年月がたっているので、予想としてレベルAでしょうね」

相変わらず情報処理が早いな拓斗。

「それじゃあ行こうか佑介」

そうだな桜。

俺達は専用の大型車に乗ってポイントの廃ビルに来ていた。

「なあ桜・・・、こんなときにいうのもなんだけどさ・・・」

俺達は現在交際5年目だった。当時は色々あったな。何とか桜に認められようと頑張ったし、認められた次は愛華のご機嫌取り。まったくもって大変だった。そんな愛華は今では許してくれている。

「そろそろ一緒にすまないか??それにお前のお親にも挨拶行きたいし」

桜は最初は真っ赤になって何もいわなかったが。

「そうだね、帰ったら連絡とって見るよ」

それは助かる。それじゃあまずわ・・・。

「この廃ビルの悪霊討伐でも行きますか!!」

これから俺達の戦いは続いていく。それでも負けはしない・・・
大切な人を守るために・・・。

（完）

守ろうこの世界を（後書き）

いかがでしたでしょうか？

最後にコメントなどをいただけると今後の執筆の励みとなります。
これからも泉海斗をよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8869m/>

守護霊（ガーディアン）と討手（ハンター）

2010年10月10日18時23分発行